

## 悲劇 第二部

### 一 雅地ある土地

春うつくしき花の雨、  
緑めでたき野の恵み  
青人草にかがやけば  
身は小さくも力あるエルフの群れは  
助け得る方へ急ぐなり。  
聖にもせよ、悪にもせよ、  
幸(さち)なき人を哀れみて。

グレチヘンの悲劇の過ぎてから、どれ丈の長い月日が経ったであろう。そうして其の間ファウストは何をして居たのであろう。兎に角彼は或る日瑞西(スイス)の中央、アルペン山上のフィルヴァルトシュテッテルゼエの畔(ほとり)かと思われる、雅致に富んだ風景の中に見出されたのである。彼は疲れ果てて、種々の草花の咲きみちて居る野原の上に横たわって居た。果然彼が救いを求めた所は大自然の暖かい懐であった。人間に対して何時も好意を持って居る大気の精アリエルは、風の吹くままに微妙な音を立てるといふアイオルス(そう)の伴奏につれて、エルフの群れと共に空に漂いながら、前にあげた歌をうたってファウストに近よって来た。彼の胸の恐ろしい戦闘は鎮められた。焼きつくように痛い自己非難の矢は心臓から抜き去られた。恐怖は漸次ぬぐい浄められた。次いで疲憊(ひはい)の後の眠りが彼を包んだ。総ての地上の経験(きんげん)を忘れさせるというレエテの水が彼の頭に注がれた。昼の門の扉は閉ざされて、深い熟睡(うまい)の幸が彼の上に来た。其の間に疲れはおのずから癒えて、手足のひきつりが伸びると、やがて朝の光が新しい希望を持ってほのかにさして来た。精霊の群れは合唱する。

時は既(は)や消え失せぬ。  
痛みも幸(さち)も跡なくなりぬ。  
先だちて知れや、汝は癒えん。  
ただ頼め、新たなる日の眼差しを。

.....

願いをば次ぎつぎに成さんとせば、  
ただ彼処(かしこ)なる光を見よ。  
汝は軽やかに包まれたり。  
眠りは殻なり。棄て去れ。  
人皆のたゆたい避くる時、  
自ら励ますことをおろそかにすな。  
理会して疾(と)く手を着くる  
心高き人は総てを成し得べし。

ファウストは再び新しい力を以て立ち上がったのである。彼の眠りが地上の時間にして幾何の歳月を要したか、それは定かでない。しかし自然の懐は再び彼に活発な生命の脈拍を与えた。彼は地上の万物が快樂を以て自分を取り巻き始めるのを感じた。彼には地上の総てが絶えず最高の存在へと志して、底強い力を働かせて居るの感ずるのである。森は無数の生物の声でどよみわたっている。谿谷を徂徠する霧の帯を穿って日光が及ぶところには、樹々の枝が勢いよく芽を吹いて来る。そればかりではない。珠玉(しゅぎよく)をかけたような花の梢に蔽われた一帯の景色が、夜の明けゆくにつれて刻一刻と眼前に展開して来る。ファウストが眼ざめて先ず感じたものは地の嫗育(おういく)の力であった。

仰いで巨人のような山の嶺を見ると、其処には既に新しい日を迎える為の晴々しい色

が漂って居た。暫くして日が出た。彼は目に沁みる光の眩さに堪えないで下を向いてしまった。そうして独語した。

『あくがれて居た期待が最高の願いに到達した時、成就の扉の開いて居るのを見た時も、こんなものだろう。その時はその永遠な底の深みから、強過ぎる焰が迸り出るので、我々は驚いて立ち止まるのだ。-----まあよい。私は日に眼を背向(そむ)けて居よう。』

ファウストの眼は次第に一つの滝に引きつけられた。岩の裂け目から落ちて来て、一段一段と走る水が、千の流れとなり、数万の糸となって、飛沫を高く空中にあげて居る。それに日光が当たって七色の虹が美しく浮いて居るのである。定かな姿を見せるかと思うと、直ぐまた空に散って、匂いある涼しい四辺(あたり)に漂う。

『ああ、此の虹が人間の努力の影だ。あれを見て考えたら、前よりはよく分かるだろう。人生は彩られた影の上にある。』

彼はそう思ったのである。要するにファウストの眼は未だ地上に向けられていた。彼は未だ地の人であった。それ故にメフィストフェレスが導くままに、更に所謂大天地を見にゆくのである。

メフィストフェレスがファウストに見せようという大天地というのは、云わば一般人類の社会的な生活である。彼のこれまでの生活が主として彼一身のことに係わって居たのに反して、彼が新たに導かれていく生活は、広く国家社会と関係を持っているのである。彼の個人的生活はグレチヘンとの恋愛によって最高所に達した観があった。彼の社会的な生活は果たして何ういう形に於いて絶頂に達するのであろう。それは兎に角、メフィストが先ずファウストを導いたのは宮廷の生活であった。

## 二 宮 廷

羅馬遠征を試みて、晴れやかな広い土地を手に入れた帝(てい)は、首尾よく神聖羅馬帝国の帝冠を戴いて帰って来たのであるが、本来人君の器(うつわ)ではなかったのである。帝はただ舞踏のように仮面をつけて、面白い事のみを見聞きして楽しもうと思つて居るのである。その為には国政は麻のように乱れてしまった。上に聖者の台光のような公正の盛徳がなければ、下に罪惡が時疫のように蔓(ひろが)るのは当然の勢いである。寺院と封建的貴族とによって支持されて来た国家も、今はどうしようもなくなって居た。其の為大臣達は、すすまぬ帝を促して御前會議を開くことにしたのである。

丁度帝が會議室へ出御される途中のことである。片時も帝のお側を去らないで居る宮中の道化が階段の上で倒れた。酒に酔っていた為であるか、それとも死んだのであるかは不明であったが、でぶでぶ肥った其の男は直ぐに誰かにかついで行かれてしまった。帝は會議室の首座につかれると共に、道化が自分の側に居ないことを慥(あきた)らなく思われる。其の間隙(すき)を巧みに利用してメフィストは帝に近づいたのである。彼は目立つような面白い風俗をして、守衛の制止に目もくれずに、いきなり玉座に近づいて跪(ひざまづ)いた。

『来なければよいがと云われていても、愈々来ると歓迎されるのは何でしょう。いつも待たれていて、来ると逐い出されるのは何でしょう。保護されるのは何で、叱られるのは何ですか。.....』

彼は畳みかけてそんな謎を口早にかけながら、それは私のような宮中の道化でしょうと云わないばかりの顔をしたのである。帝は新参の道化が直ぐに来たことを心に喜びながら、

『まあ、そう饒舌(しゃべ)らないでもよい。この場ではそんな謎は不用じゃ。前の道化はどうやら遠くへ参つたらしい。お前その代わりに、私の側に居るがよい。』

彼はこうして宮中の道化となって、帝の左右に侍ることになった。會議は始まった。帝が耳にせられることは悉く面白くない国内及び府中の話のみである。尚書(しょうしょ)は訴えた。

『誰でもこの高殿の上から広い国中を見下ろされたら、苦しい悪夢のように思うでしょう。異様のものばかりが押し合って、不法が法らしく行われ、非理が世間一ぱいになっていますからなあ。家畜や女が盗まれる。危害が加えられる。裁判所は訴訟人で充ちて居るのに法官はただ厚い布団の上に威張って居る。無辜(むこ)の者が罰せられて、徒党を組んだ暴虐者が賞揚されています。.....恐れながら民が皆傷(やぶ)り害(そこな)い痛み苦しんで居りましたら、帝位の尊厳も賊物(ぬすまれもの)になってしまおうかと存じます。御聖慮はいかがでございましょう。』

次いで兵部卿が口を開いた。

『此の頃の乱世の騒ぎは如何でございましょう。互いに相殺戮して号令も耳には入らないらしゅうございます。市民は壁の後ろに、騎士は岩窟に立て籠もって、公(おおやけ)に背いています。傭兵は給料を催促して、払ったが最後逃げ出しそうにして居ります。最も此の傭兵が守るはずの国は、掠められ荒らされて、もう半分は駄目になっています。まだ外藩の王たちは居られますが、自分事のようには考えておられませぬ。』

それを引き取るように大府卿が訴え始めた。

『もう連邦の盟(ちかい)を当てにすることは出来ずまい。約束の貢ぎ物は、水道の水が切れたように、少しも参りません。その上国内でも占有権が新しい人の手に落ちて、それが各自独立したいと云って居ります。もう総ての権利は皆譲ってしまって、公の手に残って居るものは一つもありませぬ。もう党派に信頼は出来なくなって居ます。彼等はただ佚楽(いつらく)を求めて止まない丈です。内容はいつも空虚になって居ります。』

中務(なかつかさ)卿は中務卿で自分の管理部門での不幸を並べ立てた。幾ら節約をしようとしても、毎日の費用は嵩(かさ)むばかりである。料理の材料は未だ不足しないが、酒がもう無くなって来た。町役場の貯蓄までも取り寄せて皆が大杯や鉢で飲むのである。そうしてその跡始末と勘定は彼の責任である。商人からは翌年の歳入を質に入れて借金をしている。帝の褥(しとね)の鳥の羽も質草になって居り、借り越しのパンを膳の上に供えるのも止むを得ないと云うのである。

帝はそれ等の苦情や泣き言を黙って聞いて居られたが、寂しい苦笑をしながら、メフィストの方へ向いて仕方なさそうに云った。

『どうだ。まだ其の他に何か難儀のあるのを知っているか。』

彼は即座に答えた。『存じません。私はこうして殿様はじめ皆様のお盛んなご様子を拝して居ります。帝位の尊厳と皆様のお働きで出来ないことは何一つある筈がありません。一体此の世には何かしら不足のものがあるものです。まあお国では金が足りませんが、そうかと云って床の下から掘り出す訳にもゆきません。しかしそこは智慧で、力量のある男の天賦と智慧によると、山の鉱脈の中や、人家の地の底からでも取って来られますよ。』

しかし尚書はメフィストの言葉を直ぐ信ずることが出来なかった。二人はやがて議論を戦わした。寺院と貴族とを国家の基礎としようと思う尚書には天賦とか智慧とか自然とか霊とかいうメフィストの説が背教、異端、魔法、不忠に聞こえるのである。メフィストは尚書を嘲弄しながら、地下に蔵されて居る宝の洪大であることを主張する。一例をあげて見ても、外寇が国疆(こっきょう)を侵(おか)した恐怖時代に、各人が不本意ながら其の最も愛した貴重品を地下に埋めた丈でも僅少ではない。そしてそれ等のものは抑々何人(なんびと)に属するか。それは地のものである。国土は帝の所有であることは云うまでもない。して見れば地中の宝は悉く帝の自由でなくてはならないというのである。地下には黄金の大杯や皿や鉢がずらりと並んで居る。紅宝石の杯には古代の酒が溢れている。そういう所を賢者は油断なく探らなくてはならない。

浅見な帝は直ぐにメフィストの此の議論に賛成して、即刻それ等の宝を掘り出すようにメフィストに命ずるのであるが、彼と雖も即座には出来ないので、帝が羅馬のカアネ

ヴァルを真似たがって居るのを知って、先ず仮装行列の催しをすすめて、時日を遷延させようとする。常に遊樂を好む帝に異論のあろう筈はなかった。日ならずして大規模の仮装行列は行われた。人生のあらゆる階級の者がその行列の中には現わされた。庭作りの男女もある。獵師、漁夫、樵者(きこり)もある。道化も酔人もある。各種の詩人と共に、希臘神話中の神々も出る。国家と秩序とを象徴した象の行列も現われる。ファウストは富の神プルトッスに扮し、メフィストはそれに従う「瘦せた人」となって出る。帝自身もパンの神に変装して行列に加わるという騒ぎである。

其のどさくさに紛れてメフィストの姦計が行われた。彼は帝に約束した地下の宝を掘り出す代わりに、紙幣発行を企てて、その新勅令に帝の署名を求めた。仮装行列の熱に浮かされていた帝は、半ば無意識にその請に応ぜられたのである。『この一枚の紙幣は××クロオネンに通用す。帝国領内に埋もれたる無限の宝をその担保となす。その宝は直ちに発掘して兌換(だかん)の用に供すべき準備既に整えり。これを一般に公布せしむ。』というのである。斯うして兎に角一時の急は救われた。軍隊の支払いも、宮中の借金も悉く紙幣で済まされた。パン屋も酒屋も仕立屋も呉服屋も大喜びで「帝国万歳」を唱えた。先にメフィストの提言に反対した者も、今は眼前の福利に目が眩(く)れて、彼に好意を表するようになった。帝がメフィスト及びその同伴者であるファウストに非常の信頼を置いたことは云うまでもない。帝は紙幣を宮中の者に一々分け与えながら、

『さあ、お前達はこれを何う使うか云って見い。』  
狂喜しながら皆は正直に答えた。  
『へい、私はすぐ女に鎖と指輪を買ってやりましょう。』  
『今迄よりずっと善い酒を飲みます。』  
『もう衣囊(かくし)の中で賽の目がむずむずしております。』  
『ええ、私は質に入れた田畑や邸を請け出します。』  
金銭の使い途は古往今来大差がないものと見える。

### 三 ヘレネとパリス

紙幣で財政の危急を救うことの出来た帝は日夜逸樂を続けていたのであるが、その揚げ句に世界一の美男美女と云われたヘレネとパリスとを見たいという大それた望みを起こして、それをファウストにせがんだのである。しかしヘレネと云えば何人でも知って居るように、希臘古代の美の典型として謳(うた)われた女である。幾らメフィストフェレスが魔法や幻術に長けていても、元来彼は北欧羅巴に産まれた悪魔であるから、希臘の世界のことに至って不案内である。それ許りではない。メフィストの与えることの出来るものは人間の卑しい快樂に関するものであって、高尚な精神の要求に応ずることの出来るものではないのである。古代の美の権化を再び喚び活かすというようなことは、彼には至難な注文である。

『どうも困りましたね。紙の金を作るように簡単には行きませんからねえ。魔女や化け物の一寸坊なら造作はありませんが、それをギリシャの女で通す訳にはゆきませんからな。』

メフィストが斯う云ったのは決して駆け引きばかりではなかったのである。

『君は何時も何か故障をつけたがる。しかし私は知って居るんだ。君が一寸呪文を唱えると、背後(うしろ)を向いている間にも連れて来られるんだ。』ファウストはそう思って、帝の命令を引き受けてしまったので、今更その約束を翻すわけには行かないのである。

『ところが私はあゝいう異端の民とは無関係です。彼奴等(あいつら)は別の地獄に住んでいるんです。尤も手段はあります。』

『それを聞こう。直ぐ云ってくれ。』ファウストは乗り気になった。

『実は本当の深い秘訣は云い度くはないんですがね。』メフィストはそう前置きをして置いて言葉を続けた。『空間もない時間もない寂寥な境地です。さあ、それはとても言葉では云えません。考えて御覧なさい。大洋に泳ぎ出して無際涯の果てを見るにした

ところで、そうして溺死するかも知れないと心配しているにしても、尚彼の立ち居は眼に映るでしょう。雲のたたずまいや、日月星辰の光は見えるでしょう。ところがそれとは違って、その空虚の境には、絶対に何一つ見るものはありません。自分の足音もしない。体を凭(もた)りかからせる固いものもない。其処に無常の人間には全く知られずに、こうごうしく住んで居る女神達がいます。あなたは先ず其処へ行かなくてはなりません。それは「母達」の国です。』

「母達」という名を聞いてファウストは戦慄した。骨の髄までもがたがたと顫(ふる)えたのである。

『母達、母親、何という変な名なんだ。』

過去にあった物も、現在にあるものも、未来に現われる物も、総てがその原形原象のままに在る、云わばプラトオの理想(イデア)の国のようなものがファウストの心にうつったのである。嘗(か)つてグレチヘンの純真の愛の焔に触れた時のような、地霊の出現を切望した時のような、高い霊の世界を念ずる心がファウストの内に動いたのである。

『宜しい。一つその奥を究めて見る。君のいう空虚の中に私は万有を見出さずには置かない。』

ファウストはメフィストから一つの鍵を受け取った。其の鍵が行くべき路を教える筈なのだ。その路は歩かれない路である。歩かれたことの無い路である。彼は何処とも知らずに、ただその一つの鍵に導かれて、総ての既生の物に背を向けつつ、解き放たれて此の世の形を失って居る物の中へ入って行かなくてはならない。

『一番の深い底に届いたということは、焼けている五徳のあるので知れます。その火の光で母達が見えるでしょう。創造と改造の神で、永遠の意義を永遠に語って居られます。神には原象しか見えないのですから、勿論あなたは見えません。そこで其の鍵で五徳に触るのです。すると五徳が神の知らない間にあなたの後をついて来ます。そうすればもう大丈夫です。其の大胆な行為の報として、あなたは夜の国からヘレネとパリスを呼び出すことができます。』

ファウストはこうして秘密の鍵を手にしなが、人知れず母達の国へ赴いたのである。

希臘第一の美男美女の出現を待ちかねて、宮殿の「騎士の広間」には、帝を始め高位高官の男女が充満しているのである。広間の一方には舞台がしつらえられて、其処には古代式の柱の沢山ある宮殿が現わされる。やがて司祭の服を着て、青葉で頭を飾った術士のファウストが五徳と一緒にうつろな穴の中から出て来た。

『無辺に位して、永久に寂しく住みながら、しかも群れをなしている母達よ。私は御身たちの名による。御身たちの頭の周囲には生命の姿が、生命なしに動き漂っている。嘗て一度光耀と現象との中に存在したものは、皆そこに動いている。永遠なることを欲するからである。万能の權威たる御身等はそれを昼の天幕と、夜の穹窿(きゅうりゅう)に分ける。其の一方のものを生命の晴れやかな道が受けとる。他方の夜の穹窿に居るものを大胆な術士が探し求めて、人の望むままに見せるのである。』

メフィストから鍵を貰ったにしろ、ファウストは兎に角この異常な仕事を自分一人で仕遂げたのである。万物の淵源とも云うべき奥秘(おうひ)の国を覗(うかが)って来たのである。彼が昂奮の極に達していたことは云うまでもなかった。彼は莊重な態度で焼けている鍵を鼎(かなえ)に触れた。暗い煙が濛々と立ち上がって広間に一ぱいになった。それが伸びたり縮んだり、入り乱れたり、並び合ったりして雲のように棚引く。その運動に合わせて、微妙な音響が起こって来た。それがやがて旋律になる。果ては宮殿の柱までが合唱をするように思えて来ると、間もなく煙は沈んで、その軽やかな羅(うすもの)のような中から、雅(みやび)やかな歩調(あしどり)で一人の青年が現われて来た。云うまでもなくそれはパリスであった。

『まあ、あの花盛りとも云うような青春の力の輝きはどうでしょう。』

『新鮮なみずみずした水蜜桃のようですよ。』

『恰好の好い唇がうまそうにふくらんで居ますわ。』  
『あんな蓋(さかずき)に口をおつけになり度いなのでしょう。』  
『上品ではないとしても、随分ようございますね。』

こういう讚嘆の声が先ず見物席の貴婦人たちの口から漏れたのである。しかし男たちは異なった意見を持っていた。

『全く知られずに 羊飼いの若い者のようで、すこしも皇子らしいとことや、宮中の行儀に馴れているところがない。』

『さよう、半裸体ではよく見えても、鎧を着てはどんなものかしら。』  
すると一人の貴婦人が云った。『あら、しなやかな好い姿をして座りましたこと。』  
他の婦人が附けたした。『あの肱を枕にした恰好のようございますことね。』  
男たちは腹をたてた。『へん、あの膝に抱かれたらよいだろうとでも云うんだらう。』  
『ふん、無作法極まっている。殿様の御前であんな風をするなんて。』

現われたパリスはやがて其処へ眠ってしまったのである。女たちは平生の嗜(たしな)みも忘れてしまって、口々に囁き合った。

『あの香(こう)の煙に交じって来る薫りはなんでしょう。私胸の底までせいせい致しますわ。』

すると少し年をとった貴婦人が合槌をうった。『本当ですわ。胸に沁みこむようね。あの人(こう)の匂いですよ。』一層年をとったのが、説明して云った。『あれは体の盛んになっている匂いでしてね、それが釀(かも)されて不老不死の名香になって、周囲へ散るのですよ。』

其の匂いに牽かれて程なく古代希臘の美の典型であるヘレネが出て来たのである。それを一目見るなりファウストは全く有頂天になってしまった。彼は自分が之等の姿を下界から連れて来た術士であることを忘れて、その比類のない美に見惚れてしまったのである。恐ろしかった母達の国への旅も、此の嬉しい一瞥によって初めて酬(むく)いられたように思った。これまで無価値であった世界、閉じられて居た世界が、今始めて望ましいもの、基礎あるもの、永存するものになったように思った。彼はこの美を捨てる程なら、自分の息の根がたえてもよいと思った。昔妖女の廚の鏡の中に見た不思議な女の影も、今日(ま)のあたりに見る希臘古代の美に比べては、単なる泡沫に過ぎないとさえ思った。自分にある限りの力の発動、熱情の精髓、傾倒、愛、崇拝、熱狂を捧げて惜しまないのは此の美、希臘古典の美であると思ったのである。

『しっかりなさいよ。自分の役を忘れてはいけませんぜ。』

ファウストの熱しかたが余りに激しいので、メフィストフェレスは心配しながらこう注意した。しかしその警告は既に遅かった。見物人の中で先ず口を開いたのは、今度も亦女だった。パリスの時と違って鋭い批評が先に立つ。

『背丈もあり、姿も好いが、頭が少し小さいようですね。』  
『足を御覧なさいまし。無様(ぶざま)に大きゅうございます。』  
『あの上品な若者に比べると見劣りが致すではありませんか。』

しかし男の側の批評はまるで違っていた。ある外交官は云った。『上の方の中に斯ういうのを拝んだことがあります。頭から足の爪先まで美しくございますね。』

詩人は云った。『あの若者はあの女の美に照らされていますね。』騎士はささやいた。『実に気高くて上品です。』

ヘレネはやがて眠っているパリスの側へ優しく近寄って接吻した。男が眼をさました時には女は二三歩退いて、男の方を振り返っていた。茫然として驚いている男の顔を見ながら、彼女はまたしなやかに男の方へ帰ってゆくのである。一人の舎人(とねり)は思わず口を滑らした。

『わたしはあの男になりとうございます。』

するとある殿上人も、『あんな網になら誰も掛からずにはいられませんね。』

貴婦人たちは嫉(ねた)ましそうに悪口(あくこう)をついた。

『浮気女が。どう見たって陋(いや)しいではありませんか。』

『あれでいろんな人の手に渡った宝ですよ。』

『十歳くらいの時からいたずらをした女ですね。』

一人の騎士は小声でそれに答えた。『人は場合に応じて、獲ることの出来る最上のものを取るものです。私はあの残り物でも結構です。』

皆がこんなことを言い合っている間に、パリスはヘレネを抱き上げて何処へか連れて行こうとしたのである。ファウストはそれを見て心の転動を覚えた。彼はパリスもヘレネも、畢竟するに自分が下界から連れだして来た幻影であることを忘れてしまった。彼は寂寞境の恐怖と波瀾とを凌いで、此の世に連れてきた限りは、それが即ち実在でなくてはならないと思った。

『母達、母たち。許して下さい。あれを知ったからは、もう別れることは出来ない。』

彼は手に握って居る鍵を振って男女に近づいた。そうして女を捕らえた。すると女の姿は濁ってきた。鍵が男の体に触ると、其の瞬間大きな爆声が出て、男女の影は霧になってしまった。そうしてファウストは地に倒れたのである。

ファウストがヘレネに於いて見たものは美の啓示であった。嘗て彼がグレチヘンに出逢って感じたものとは、その心情の内容が全然異なっていた。グレチヘンは要するに人の子であった。人の子として彼に愛された。たとえその愛は無意識の間に彼に永遠の世界を示し、天上の光を見せたとはいえ、彼女は遂に人の子であった。それにひきかえて、今ファウストが見たヘレネは、彼がアイデアの世界から、実在の奥庭から、伴って来た姿である。彼がヘレネに対して新しい熱情と執着とを感ずるのは、云わば人間に固有でまた永遠である審美心に其の根源を持っている。若し恋愛と審美心とが其の奥秘(おうひ)に於いて相通ずる所があるのなら、グレチヘンに対する彼の愛着とヘレネに対する彼の傾倒とは、一味の相通ずるものがあるであろう。しかし女性に対する愛と、美を思う心とが異なっている意味に於いて、此の二つの場合はまた全く異なっていない。実にヘレネを知ったことはファウストにとって、新生涯への一転機となったのである。況(ま)してや彼は本来北欧羅巴の薄暗い空気の中に育てられて、加うるに北欧羅巴の悪魔であるメフィストを同伴者として来た。それが今突如として、明快暢達(ちょうたつ)の趣に充ちた希臘古代の美を見たのである。彼の前に新生涯が開けようとすると言っても、必ずしも過言ではない。

## 四 小 人

意識を失って地上に倒れたファウストは、直ぐメフィストフェレスの肩に運ばれて、昔大学教授として住んで居た古い家の古風な寢床の上に寝かされたのである。彼は未だ昏昏として眠って居て、自分が何処へ来たかも知らないでいた。メフィストに云わせると、「ヘレネに現(うつ)つをぬかしたものは、容易に正気には帰れない」そうである。高い円天井のあるゴシック風の狭い部屋は、主人が去った後誰一人住む者もなく、その儘になっていた。書籍や器械の類は云うまでもない。卓(テーブル)の上の鷲ペンや、古い鉤(かぎ)に懸かっている古い毛皮までが、突然此処を出て行った其の日の儘の位置に置かれていた。しかし長い年月の経過は此処にもその跡が認められた。窓の色硝子は前よりも少し曇っていた。蜘蛛の網は殖(ふ)えていた。インクは乾き固まって、紙の色は黄ばんでいた。久しく人気のなかった為に、毛皮の中なぞには昆虫が巣をつくって蟋蟀(こおろぎ)の類が歌をうたっていた。さすが悪魔のメフィストも、昔を懐かしむしおらしい心持ちになって、暫く其処に立って居たのである。

しかしファウストの留守の間に時勢は著しく変化して居た。嘗てファウストの書齋を訪れて学問研究に対する指導を請うた年少の学生は、今はもう立派な得業士になって、新時代の思想感情の代表者となって居た。彼は丁度フィヒテの哲学の教えるような自我の絶対を信じていた。彼には先輩も権威も何もない。否寧ろそういう物を憎んで居た。

彼の信条によると、人間の生命は血にある。そうして青年の体ほど血のよく環(めぐ)って居るものは他に無いのであるから、新生命を産出するものは青春のみである。老は冷たい熱病である。三十歳を過ぎれば人は死んだも同然であるから、寧ろ撲殺するに若くはないと思っている。そればかりではない。彼の考えに従うと、世界の万物は自己があって始めて存在するのである。太陽を海から引き出したのも、月を盈(み)ちたり虧(か)けたりさせるのも自己である。季節のあわれ深い変化も、星辰の運行も、一切自己のさせる業に過ぎない。実に人間を四圍の狹隘と束縛とから脱出させて、靈の導くがままに、自由と歓喜とにあふれながら、美しい光明を趁(お)って進ませるものは、此の高遠な思想の力である。

こういう自己独尊の思想が既に一部青年の思想を支配している他面には、しかし又ヴァグネルのような人が一代の泰斗として崇拜的(まと)となっていた。彼の研学の態度は、昔彼がファウストに師事して居た頃と少しも変わっては居なかった。彼が一番重んじて居るのは今も昔と同じように人間の知識だった。人間の悟性だった。そうしてその結果彼は一大事業を思いついた。その為には彼は総ての訪問を謝絶し、門生の出入りさえも禁じて、既に数月の間一室に籠もって静寂を守って居る。彼は炭焼きのように眼を赤くし、鼻から耳の辺りまでも真っ黒にして火を吹いて居る。そうして火箸をちゃらちゃら云わせながら、引っぱりなしに喘(あえ)いでいる。それは実に人間創造の為である。ヴァグネルのような悟性の権化の眼から見ると、在来の如き方法で人間を作るとは、卑しむべき貶(しりぞ)くべきことに思われた。それ故、譬え今後も畜生動物はあの種の繁殖の道を楽しむにしても、偉大な天賦を享(う)けた人間のみは、在来よりも遙かに高尚な出産を祝わなくてはならない。斯ういう見地からヴァグネルは、昔錬金術師が試みたと同様な方式によって、数百の物質を調合して、人間の原質を組み立てて、それを硝子瓶に入れて封じた上蒸留する。そうして生命ある人間を作ろうと企てているのである。しかもその難事業が丁度ファウストを連れてメフィストフェレスの帰って来た夜に成功したのである。

正気に帰らないファウストを、昔のままに保存されて居る昔の儘の寢床に眠らせたメフィストは、門弟や得業士を相手に暫く駄弁を弄(もてあそ)んで居たが、それにも飽きてヴァグネルの実験室へ来て見たのである。ヴァグネルは実験で夢中になって居た。一生懸命に見つめて居るその硝子瓶の、暗く濁った所が澄(す)んで来て、一番の中心とも思うあたりが、火のように、いや、赫奕(かくえき)たる紅宝石のように光って来た。その中に一道の白光が瓶の中から迸(ほとばし)って来た。彼は入って来たメフィストを顧みながら大気焔であった。

『そら、出来ますね。調合物が澄んで来ました。古来造化の秘密だと称せられた事を、我々は敢えて悟性でやってのけるのですな。自然が機械的に作っていた事を、我々は結晶させて造るんです。そおら、昇って行きますね。光って来た。凝固して来ます。もう成功だ。大企図というものは最初は馬鹿げて見えるものですよ。いまに旨く物を考える脳髓をさえ、思索家が造り得られるようになるのですな。』

その大気焔も空(あだ)ではなかった。やがて瓶の中には小さい人間が出来上がったのである。小人(ホムンクルス)はヴァグネルに向かって声をかけた。

『さあ、お父さん。私を優しく胸に抱いて下さい。しかし帽子の破れる程ひどくしてはいけませんよ。物事はこうしたものでしてね。「自然の物には宇宙も狭いが、人工の物には限界がある」のですよ。』

この小人は 生まれ出た瞬間から、非常な活動力と伶俐さを持って居た。彼は一瞬間も静(じつ)としては居られないのである。それ故早速そこに居るメフィストを見つけ何か仕事をしたいと申し出すのである。ヴァグネルは狼狽して今生まれ出て、直ぐにもう働こうと思って居る小さい人間に声をかけた。

『一寸一言云わせてくれ。私は今迄老人や青年から種々の質問で苦しめられた。例えば「零と肉とはきちんと適合して決して分離しないように附着(くつつ)いているのに、

その二つが不断人の生活を六ヶ敷くしている。而も誰一人それに答えることの出来るものがない。それは何という訳だ」と聞くのだ。それから.....』

メフィストは例の嘲笑を含んだ皮肉でそれを遮った。

『お待ちなさい。そんなことを聞く暇に「一体男と女とは何故仲が悪いか」とでもお聞きなさい。お前さんなんぞにはとてもわかりっこありませんや。此処に丁度この小人がし度いと思ってる仕事があるんです。』

小人は眼を輝やかした。『何をするんです。』

メフィストフェレスはファウストの寝ている部屋の戸を指した。部屋の戸は静かに開いた。其処に寝ている人を見て小人も驚いた。『これは素敵だ。』彼は思わずこう叫びながら、ヴァグネルの手から滑り抜けて、ファウストの眠っている上の中空に浮動して彼を照らした。純粹に知識的な仕事によって全く人工で作られられた小人は、知識的には既(も)う十分の発達をしているので、ファウストが夢の中で見ていることを明らかに読むことが出来るのである。森が鬱蒼と繁った陰に、水晶のような水が清く湛えられている。其処にニンフかともがうような美しい女たちが水を浴びて居る。中に一人気高いのは上王であろう。其の時一羽の鵠(はくちょう)が突然水面を乱して女王に近づいた。外の女たちが驚いて逃げ去ったにも拘わらず、女王はそれを女らしい誇りと楽しさとして見ているのである。そうした光景が今ファウストの朦朧とした意識の前に浮かんでいるのである。これは云うまでもなく古い伝説の世界である。女王はスパルタの王ティンダレオスの妃(きさき)レダである。その美しさに迷ったツォイスの神が鵠に姿を変えて、水浴の際に女王に近づいた。そうして産まれたのがヘレネであると云われている。ファウストは今ヘレネの父と母を幻に見ているのである。しかし北欧の蒙昧時代に生まれたメフィストは希臘古代の伝説なぞは全く知らないで、其の夢が解らないのは無理もないであろう。其処で小人は其の夢の内容から判断して、ファウストを南欧の天地へ連れてゆくことが最も得策であると考えたのである。

『こんな茶いろになった石壁の中で眼をさまそうものなら、この人は死んでしまいますよ。丁度よいことがあります。今は古代のヴァルプルギスの晩に当たります。ですから此の人の性(しょう)にあった彼処(あそこ)へ連れて行ってやろうではありませんか。』しかしメフィストフェレスはそんな催しのことは全く聞いたことも無かった。小人は云った。

『それはそうでしょう。あなたのお馴染みはロオマンチックの化物(ばけもの)です。本当の化物はクラシックでなくては。』

『それにしてからが、どっちへ向いて出かけるのだい。』

『あなたの領分は西北の方ですが、今度は東南の方へ飛んでゆくんです。』

テッサリアの広い平原をペネイオスの河が悠々と流れて、森を縫い藪に囲まれて、静かな入り江をなしている辺り、所謂ファルサロスの野に、古代ヴァルプルギスの夜は祝われる。それはケエザルがポンペユスと戦って勝った八月九日で、毎年その夜には古代の霊たちが此処に集まると云われている。小人はメフィストの外套を取ってファウストに被(かぶ)せた。

『さあ、これで今迄通りあなた方お二人はお飛びなさい。私が先に立って明かりを見せて差し上げます。』

ヴァグネルは氣遣わしげに訊ねた。『それで私はどうすればよいんだ。』

『あなたは家で大切なことをしておいでなさい。古い羊皮紙を繰りひろげて、方式通りに生活の元素を集めて、綿密に抱合させて御覧なさい。私はその間に世界の一部を歩いて来て、j の字の頭の点を見出しましょう。そうすれば大目的が達せられたというものです.....』

失望しているヴァグネルを一人残して、眠っているファウストを伴った二人はやがて空高く飛んで行ってしまった。

## 五 古代ヴァルプルギスの夜

三人がペネイオスの河畔の上空に出た時には、希臘古代の霊たちは既(も)う集まって、其処にも此処にも赤い篝火(かがりび)が、流された血の反映のように燃えて居た。夕月の光に透かして見るとテッサリアの魔女のエリヒトオも亦此の夜を祝おうとして出て来たのが見えた。小人は魔女を遣り過ぎて置いて、メフィストにすすめてファウストを地上に降ろさせた。

『騎士さんを降ろしてやりましょう。そうすれば直ぐに蘇生しますよ。昔話の国に生きようと思っているんですから。』

ファウストは果たして眼を覚ました。地の子アンテウスが土に触れて力を得たように、憧れて居た希臘の国に立って、其の心は新しい活動を始めたのである。正気に帰るや否や彼は云った。『彼女は何処へ行った。』ヘレネのことを思い続けて居たのである。

『私たちは知りませんが、此の辺でおたづねになって御覧なさい。きっと知れますよ。夜の明けない中に篝火から篝火へと訪ねてお歩きになるんですな。母達の国へさえ行らったんですから恐ろしいことはありませんよ。』

小人は斯う云った。此処へ来てはメフィストは全く不案内なので、ファウストの役には立たない。小人とてただ彼を連れて来たのみで其の上の助力は出来ないのである。そればかりではなかった、小人がファウストを伴って此処へやって来たのには、他にまた自分自身の目的があったのである。彼は小さいながらも精神の力に於いては既に成熟した人間であった。ただ肉体がない。薄い硝子の外には其の住み家がない。小人は此の小さい住み家を脱して美しく成り出でたいという大望を持っている。彼が古代ヴァルプルギスの夜を訪れたのも、一方には此の大望を成就させたかったからである。「jの字の頭の点を見出す」とヴァグネルに云ったのも結局(つまり)その事である。それ故ファウストは一人でヘレネを探さなくてはならない事になった。人間は美を自ら見出さなくてはならない。そして其の力を持って居る。

『彼女は何処にいるんだろう。それはまあ差し当たり問わないことにして置こうか。此の地が彼女を載せた地、此の波が彼女の方へ打ち寄せた波でないとしても、此の空気は彼女の言葉を伝えた空気だろう。此の足に触れているのが希臘だということは直ぐ分かる。どんな奇異怪事も驚くことはない。私は此の迷路の奥を探らずには置かないのだ。』

小人とメフィストフェレスが去った後、ファウストは一人感激して暫く其処に立っていた。其の場所はテッサリオスと云って、エニポイス河が貫流して、北をペネイオス河に限った野であった。そうして古代の怪しい諸霊はペネイオスの上流、即ち二つの川の合流する所から、ペネイオスの下流に沿って集まっていて、更に海上にまで及んで居る。そうしてこれ等の霊はグライフからガラテアに至るまで、ほぼその階級に従って、低級のものから高級のものへと、上流から下流の方へと屯(たむろ)していた。そうしてファウストは今河に沿って漸次下流の方へ、ヘレネを訊ねて下って行ったのである。彼は見る物毎に驚嘆の声を放った。醜い下級な怪物にも偉大な力の籠もった趣がある。そうして先ずスフィンクス達にヘレネの在所(ありか)を訊ねて見たが、彼等は時代が違うから知らないというのである。いかしヒロンに聞いたら知ってるかも知れないと教えてくれた。ヒロンというのはクロノスを父としフィリラを母としている有名な人首馬身のツェンタウルで、草木をよく知って居て医術にも達し、音楽や天文にも通じて居た。そうしてヘラクレス、エスクラヒュウス、イヤアゾン、アヒレス、その他当時の貴公子たちに種々の学問技芸を教えたと云われて居る。その為賢者ともあがめられ、又半神とも呼ばれていた。このヒロスに逢いさえすれば一道の光明が開けるに相違ない。祭りの晩には其の辺を始終駆け廻っていると聞くのも心丈夫だ。ファウストは足を早めてペネイオス河の下流の方へ急いで行った。其の辺にはもう怪しい物の姿はなくて、河の流れが静かに歌をうたっている。蒲(がま)の葉が戦(そよ)ぎ、葦がゆれ、柳の枝がさやぎ、楊樹(ようじゅ)の梢に風のほのめくのも趣のある夜の様である。試みに川辺近く立ち寄って見ると其処には少女の姿をしたニムフの清い群れがいるのではないか。彼は自分の見て居る

世界が夢では無いかと疑った。軽くそよいで居る灌木の群れの清爽な緑の中を、水が静かに、荒い音も立てずに通っている。そうしてそれが集まって澄み切った池のように湛えられている。裸体の美しいニムフ等の手足が水鏡に映って、二重に眼を喜ばせる。少女等は仲よく楽しげに水を浴びたり泳いだり、浅い水を渡り歩いたりしている。よく見れば緑の鬱蒼として繁っている中に、女王と見える気高い姿がちらついていた。其の時入り江の方から、威厳のある美しい容子をして鵠(はくちょう)が泳いで来る。世に傲(おご)り、また自らを喜ぶらしいその鳥の振る舞いのあでやかさ。

ファウストの眼前には、彼が嘗て昔の書齋に昏睡しながら見た皇妃レダと鵠との場面が現(うつ)つに展開したのである。彼は暫時恍惚として我を忘れてしまった。

『皆さん、此の青い岸の階段に耳を押しつけて聞くと、遠くから馬の蹄の音が聞こえますよ。今夜のお祭りに急ぎのお使いの役目をするのは誰でしょうね。』

こういうニムフの少女の声に驚いて眼をあげて見ると、眩(まばゆ)い程の白馬に騎(の)って駆けてくる者がある。

『奇蹟だ。奇蹟だ。』

ファウストは有頂天になって叫んだ。『幸運が私に向いて来たらしい。あれはどうもヒロンのようだ。』

実際それは騎士ではなくて、人首馬身のツェンタウルで、有名なヒロンであった。ファウストは躊躇せず(ちゅうちよ)に声をかけた。

『ヒロンさん。一寸待って下さい。あなたにうかがい度いことがある。』

『何事です。しかし私は止まってははいられない。』

『では連れて行って下さい。』

『よろしい。私の背に乗るがよい。そうしたら聞くことも出来よう。どこへ行き度いのだ。場合によっては川越えをさせてやってもよい。』

ファウストはヒロンの背に乗りながら答えた。

『ええ、何処でもよいのです。此の御恩は長く忘れません。』

ファウストは此の有名な高德の人首馬身の半神の背に乗ることの出来る光栄を喜びながらも、話はいつか希臘の古英雄のことに落ちて行った。

『そこであなたの知っていらっしゃる英雄達の中で、あなたは誰を一番えらいとお思いですか。』ファウストが訊ねた。

『先ずアルゴオの船にのった人達は、それぞれ他人に立ち勝った所を持って居た。若くて風采のよいことではカストオルとポルックスだった。勇敢の氣象ではツェテスとカライスだった。沈勇で聡明で、女たちにも悦ばれ、勢力のあったのはイヤゾンだったろう。それからオルフォイスはリラの琴の名手だったし、リンケウスは千里の遠くを見る眼を持って居た。心を合わせ力を一つにしなくては大事は出来難いものだ。』

ヒロンは更にヘラクレスの卓越していたことを称讃して、歌にもうたい難く、石にも刻み難いと云った。『地の女神ゲアの胎(はら)からも、あんな英雄はまたと生まれまい。永遠の青春の神へエベも二度とあんなのを天へ連れてゆくことは出来まいと思う。』

ファウストは云った。『そうでしょうか。そこで一番立派な男のお話は承知しました。こん度は一番美しい女のお話を伺いたいものです。』

云うまでもなくヘレネのことを指しているのである。

『なに女の美なんというものはつまらないもので、兎角凝結したようになり易い。私は流動性の姿でないと讃(ほ)めない。美の尊さは独立しているのさ。私がいつか乗せてやったヘレネなどは、誰も異論のない美人だろうな。』

『え、あなたが乗せてやったのですか。』

『うん。この背中に。』

『ああ、そうですか、この私の乗せて戴いている有難い背中にですか。』

『お前さんが今しているように、その鬣(たてがみ)を掴んでいたよ。』

ファウストは気が遠くなる程喜びながらも早口に訊ねた。

『それから何処へ連れてゆかれました。あれは私の慕っている唯一人の女です。』

『さあ、それはね。あれが賊の為に盗まれようとしたのをカストオルとポルックスが救った時だった。沼があって困って居る時に私があれを乗せて泳ぎ越してやったのさ。』

『でもそれはヘレネの十歳ばかりの頃ですね。』ファウストはいぶかりながら訊ねた。

『ははあ、お前さんも博言学の先生に欺かれているね。神話の中には年齢はない。』

ファウストは、ヘレネが死後再びロイケ島に現われてアヒルと結婚して子まで出来たという伝説などを思い出して、ヘレネが時間に束縛されない、時間と場所とを超越した存在であることを考えて、自分が再び手にすることが必ずしも不可能ではないという確信を強くした。

『私のこの強い憧憬(あこがれ)の力で、私にだってあの姿を二度と現(うつつ)に返すことが出来そうなものです。あの偉大でしかも優しく、威厳があっても愛らしい、神々にも等しい永遠な姿をですね。あなたは昔見られた。が私は今見たのです。感動せずには、愛慕せずには居られない美しさです。私はもう彼女が無くては生きてはいられません。』

ファウストの熱狂しかたが余りに激烈なので、ヒロンはその心を鎮める為に大医アスクレピオスの娘のマントオの許へ連れて行くことにした。マントオが薬草の力でファウストの狂気を根治するだろうと思ったからである。そう云って居る間に直ぐマントオの祠(ほこら)の前に来た。彼女は毎日毎夜その中に座って静かな祈禱を続けているのである。ヒロンはファウストを彼女に頼むと直ぐに去ってしまった。

『出来ない事を望む人が私は好きです。』

マントオはそう云ってファウストを迎え入れた。彼女の祠は丁度ピドナの古戦場に立って居て、下界の女王であるペルセフォオネの所へ行く暗い廊下もある。オリムポスの山の下空洞(うつろ)の中に住んで居る此の下界の女王に願ったら、ヘレネを再び此の世に返すことが出来るだろうと云うのである。ファウストは喜んでマントオと一緒に下界へ降りて行った。

ファウストが斯うしている間にメフィストと小人(ホムンクルス)とは何をしていたろう。

メフィストは此の夜ここに集まるものが妖怪の類であることを知って、多少の好奇心と心安さを感じて居たものの、さて愈々来て見ると、右にも左にも見馴れないものばかりが並んでいるのに驚いてしまった。就中大概のものが裸体で、襦袢を着ているのは極めて稀なのに少なからず辟易した。

『おれ達も心底から自堕落に相違ないが、古代の奴ときたら烈し過ぎるなあ。』

彼は心中そう思いながらも、上面(うわべ)だけは丁寧にして、怪物の中を廻って歩いた。其処には頭は驚で体は獅子の形をしたグライフという黄金(こがね)を守っている怪物がいる。狐又は犬程の大きさの蟻がいる。これは巣を作る時に土の中から黄金を掘り出すと云われている。すると黄金を盗むと云われる一つ目の怪物のアリマスぺもいる。何処へ行っても大して歓迎されなかった彼は、更にエジプトから来たスフィンクス等の間へ入って話したが、それも長くは続かなかった。

『あなたもお国ではよい気でいらっしゃるんでしょうが、ここでは余り御愉快ではなさそうね。』

スフィンクスが優しく斯ういうのもメフィストには癢に触って、

『お前も体の上の半分は甘(うま)そうだが、下の獣は気味が悪いぜ。』なぞと悪口を云わずには居られなかった。河畔の白楊(やなぎ)の枝の上には、美しいセイレン鳥が、体をゆすって誘惑的な声で歌をうたって居た。これは女の頭を持った美しい羽根の鳥で、旅人や船人を迷わせてその生命を奪う怪物である。頭の上には角鷹の嘴(くちばし)をし鴨の足をして居るスチュムファアリデスが冬の風のように速く飛んでゆく。その間に交

じって、胴から斬り放されたレルナの蛇の首だけでも飛んでいる。向こうを見ると若い女の姿をした合唱の群れがいる。それは人間の肉と血を特に好むというラミエエである。メフィストはスフィンクスとの話にも飽きて、そろそろラミエエの方へ行こうと思っていると、地の底から地震の神セイモスが唸(うめ)き声をあげた。

『もう一度力を入れて肩で持ち上げたら、地の上に出られるだろう。』

すると間もなく気味の悪い海の遠鳴りのような響きと共に大地がぐらぐらと鞦韆(ぶらんこ)のように揺れ出した。そうして見る見る山が一つ出来て、メフィストとスフィンクスとの間を隔ててしまったのである。地震の神は昔若かった頃に、夜の祖先の混沌(ハオス)の前で、ペリオンやオッサの山を手毬(てまり)のように取って投げたことを思い出しながら、地上を昼のように美しく山脈で飾ったのは自分の功績であると自慢する。

地震で裂けた地面の間から黄金の脈が見える。グライフはそれを蟻に運ばせる。地下に住んで居て鍛冶の術(わざ)に優れていると云われる侏儒(いっすんぼう)の群れも出て来る。

メフィストフェレスは一瞬の間に山が出来たのに驚きながら、谷間に燃えている篝火の間を迷い歩いて妖女のラミエエの群れにからかい乍ら、却ってラミエエに嘲弄された。美人だと思って掴まえて見ると箒のように痩せて居て、顔は身慄いがする程醜い。太った女だと思えば隠士菌(いんしきん)ではじける。小さくて可愛らしいと思うと手の中を摺り抜けてしまう。垂れ下げの髪が蛇のようにぬらぬらとする。其の間に一本足の女エムプウザが入って来て、自分はメフィストと親類だなぞと云う。メフィストの片足は馬の蹄がついているのに、エムプウザは驢馬の足を持っているからだ。流石のメフィストも辟易してスフィンクスを恋しがりながら、今出来た山を攀じ登って、山の少女のオレアスや櫛(か)しの木の少女ドリアス等に声をかけて通って来ると、明るい月光も透らない、森の下闇の洞穴(ほらあな)の中に、恐ろしい三人の化物(ばけもの)が居るのを見つけ出した。一番古くから嫌悪されている罪悪でもこれに比べては醜いとは云い難い。一番ひどい地獄の入口にも我慢して据えては置かれぬ程気味が悪い。この三人は一つの目と一本の歯とを共同に使って居る。これは夜に産まれて、夜に生きている闇の女のフォルキアスであった。

メフィストは考えた。若しファウストがヘレネを得て帰るとすると、元来北国の悪魔である自分は、ファウストとヘレネの作る新しい気円気に応(ふさ)わしくなくなるだろう。それを防ぐには希臘古代の悪魔の誰かに頼んで、暫時其の姿を借りるに越したことは無い。それにはこの最も醜悪なフォルキアスが持って来いであると。其処で程のよいお世辞を振りまきながら三人に近づいて、とうとう其の一人の姿を借用することに成功したのである。闇の女のフォルキアスはもと混沌(ハオス)の娘である。物を否定する霊のメフィストフェレスが其の中の一人に姿を変えることは、神話学上から見ても差し支えはないと考えられたのであろう。

ファウストにしてもメフィストにしても兎に角此の古代ヴァルプルギスの夜の冒険は成功だと云うことが出来た。ファウストは地下の国へ行って其処の女王ペルセフォオネにヘレネをもう一度この世界へ返して貰うように頼む手懸かりを得た。メフィストはヘレネに近づくことの出来るような姿を闇の女から借りることが出来た。しかし小人は終にその成り出で度いという望みを達することが出来なかった。彼はどうしたら最も善い意味に於いて成り出ることが出来るか、どうしたら真に自分が成立するかと云うことを知らなかった。それ故到る所で耳を傾けた結果、終に二人の哲学者が互いに自然の成立を論じて居るのを見つけ出した。そうして其の説をきいて自分の成立を助けようと考えたのである。メフィストフェレスはそういう哲学者の言説なんか畢竟何の役にも立たない、自分自身でする方がよいと勧めたのであるが、小人はその意見を入れることが出来なかった。その哲学者というのは、火山論者のアナクサゴラスと原水論者のタレスであった。火山論に従うと大地は其の内部の火で溶けた物質から出来たのだと云う。之に反して原水論者は流動していた原質から豊成せられたものが大地であると主張するのである。

『君ほど頑固で人の説に服しない人間はいない。火の気で此の岩は出来ているのだ。』

『生物は水気で出来たのだ。』

こう云って互いに降らない二人の哲学者の後をついて、地震が揺すったり、山が新しく出来たりする中を小人は進んで行った。大地の成立に就いての学者の説から、自分の成立に関するよい助言を見つけ出すことが出来るかと思ったからである。そうして終に原水論者のタレスの説に従ってアイゲウス湾で祝われる海の祭りを見に行つた。

小人はタレスに連れられて海の神ネレウスの許を訪れた後、其の意見に従って、同じ海神のプロトイスのところへ行つた。これは変形を最も得意とする神で、変現出没殆どつかないことが出来ない。此の神は非常に好奇心に富んで居るところから、小人を喜んで迎えた上に、「先ず広い海上へ出て、極く小さいものから併呑して漸次大きくなる」ことが、成り出でる為の最上策であると教えたのである。そうして三人は岬から海の祭りの行列を見ることにした。

漫々たる海上には、明るい月の光が銀色の光を投げて居る。月神ルナを讃えてセイレンの群れが歌って居る。遙か遠くから波の上を滑って鮮(あざ)やかに近づいて来るのは、海の少女等のネライデンと魚尾を持ったトリイトンの群れである。彼等は今夜の祭りの守護神としてサモトラケからカペイロイの神三柱を迎えて、大亀ヘロネの背に載せて帰って来たのである。造形美術の始祖で、海神プツヌスの為に凧と暴(しけ)とを指揮する三枝の矛(ほこ)を鍛えたと云われるテルヒイネスも来る。魚尾の馬に乗っている其の三枝の矛も祭りの為に担ぎ出される。海の牡牛や、海の犢(こうし)や、牡羊等に乗ったリビアのプシルロイ、イタリアのマルシ等が近づいて来た。これは幻術で蛇を使う人民だと云われている。其の後からドロス族の女等がガラテアを戴いて続いて来た。皆鯨に乗っている。ガラテアは海神ネシウスの娘で、アフロディーテが昇天した後は海の女神として尊崇の標的(まと)となっている。女神は今貝の車に乗って近づいた。母に似た其の姿、厳めしさは神々に似て居ながら、優しく懐かしいことは人の世の女にも似て、尚たおやかな嬌態を持っている。

此の行列が海上を儀式めいた鎖を作って練り歩いているのを見て、ネレウスの神はいとしい娘のガラテアを見ることを喜び、タレスは感激して万物の原型は水だという所信を確かめる。変形の神プロトイスは姿を鯨に変えて、小人を誘って、ガラテアの貝の車に近づいてゆく。

『この恵ましい水気の中では、何を照らして見ても美しくないものはありませんね。』

小人は硝子の中から出来る丈其の生命の光を発しながらガラテアの足の傍(そば)、貝の車の辺りまでも近よって行った。併し節度を忘れた小人の憧憬(あこがれ)は終に破滅の原因であった。彼の硝子はガラテアの光り輝く玉座に触れて砕けた。そうして其の生命の火は、燃え立ったかと思うと直ぐ月光に照らされた波の中に流れ散ってしまったのである。

人智のみから生まれたものには、終に正しい成立が出来なかった。

## 六 ヘレネの帰城

マントオに連れられて、下界の女王ペルセフォオネの許へヘレネの再生を乞いに行つたファウストが、どんな巧みな哀訴をしたか、それは我々には全く解らない。しかし彼が此の一事に満身の智慧と赤誠とを傾注したことは疑う余地はない。そうして兎に角ヘレネを再び地上の世界へ返して貰うことに成功したのである。其の条件として彼はヘレネをスパルタ以外には出さないという条件をつけた。それから自分は一步先にアルカジアへ帰って、ヘレネを迎える準備をしていた。彼はオイロタス河の源が滾々(こんこん)として流れ落ちる辺(ほとり)に、タイゲトス山を背に負って、美しい城塞を構えた。それは自然石を積み重ねた許りの希臘風の城と違って、磨いた鋼鉄のように平滑な壁が、鉛直に屹立し、水平に延びて、厳然と聳えている様は、見る人の眼を驚かすものがあつた。彼は其処にキムメリオイの闇から出て来た放胆な一族の支配者として、その附近の人民の上に君臨して居た。実にファウストは十三世紀初頭に希臘に建てられた拉典(ラ

テン)王国の城主のように、中世の騎士として、また浪漫的精神の代表者として、希臘古代美の権化とも云うべきヘレネを迎えようとして居るのである。一代の師表として仰がれた学者のファウストは、妖女の廚(くりや)で青春を取り戻した。そうしてグレチヘンとの恋愛を頂点とする種々の体験を経た後、所謂大宇宙の周遊を始めて宮殿に入った。そして偶然の機会は彼にヘレネの美、希臘古代の美を知らしめた。古代ヴァルプルギスの夜の見聞を超えて、彼が浪漫的精神の代表者であることを確実に自覚したのは当然である。彼はもう単なる一個人のファウストではなくて、民族精神の代表者として我々の眼前に立って居るのである。

さて、ヘレネは静かに永遠の眠りを眠っていた下界から呼び覚まされて、此の世に帰って来てみると、不思議にも父のティンダレオス王がパルラスの岡から帰って来て建てた、あの昔の宮殿の前に立って居た。彼女の後ろには虜(とら)われたトロヤの女達十二人と、それを統率しているパンタリスとが従っていた。彼女は自分の見て居るのが真の現実であるのか、それとも昔逢った事の影か幻なのか、抑々また自分の存在さえが夢の夢なのか、我ながら確かには解らなかったのである。彼女はスパルタのどの家よりも美しいと称えられた父の家の階段を昇りながら、幼少だった時の記憶を呼び起こした。姉のクリテムネストラや、兄弟のカストオル、ポルックス等と遊び戯れたのも此の家である。そうして父に選ばれた婿がねとして、メネラスが初めて其の男らしい輝きに包まれて彼女の前に立ち現われたのも此の家である。彼女はキテラの島でパリシに奪われてトロヤへ行って以来、経験した数え尽くし難い程の数奇な運命や、自分一人の為に惹き起こされた戦争や、それに伴った無数の不幸災害を顧みて、美しく生まれた自分の身をかこたずには居られなかった。英雄の偉業も盛名も、金銀珠玉の絢爛たる輝きも、その前には全く力を失うと云いはやされる女の美も、思えば却って人間に負いきれぬ重荷であった。

母のレダが水浴の折、ツォイスの神が白鶴(はくちょう)の姿になって近寄って、そうして産まれたヘレネは、十歳の時既にしなやかな小鹿のような美しさの為に、剛勇なテゼウスに奪われて、アッチカのアフィドネの城に連れて行かれた。その時は兄弟のカストオルとポルックスが救い出してスパルタへ連れ戻した。それから優れた多くの貴公子たちの争いの的にされたが、父のティンダレオス王は、大胆な航海者で同時に内治の才にも長じて居たメネラスを彼女の夫に選んだ。そればかりか、無数の財宝と一緒にその居城をさえ彼に譲り与えたのである。二人の間にはヘルミオネという可愛い子さえ出来た。それにも拘わらず夫のメネラスがクレタ島へ出征していた隙をうかがって、美しすぎた客のパリシが来た。キテラ島のディアナの神殿に参詣の役目をつとめた彼女は、終に其処からパリシに誘拐されてイリオスへ連れて行かれたのである。それを取り戻す為にトロヤ十年の戦争は起こされた。幾多の英雄はその為に戦場の露と消え失せた。パリシが戦死すると、彼女はやがて其の同胞のディフォブスの手中のものとなった。彼女は実に烈しい誹謗の中心ともなり、またあらゆる讃嘆の的ともなった。トロヤは終に陥(おちい)った。ヘレネを我がものとして居たディフォブスはヘネメラスの為に耳を斬り鼻をそがれて虐殺された。メネラスは妻のヘレネと一緒に軍勢を率いて国へ帰った。彼はオイロタスの港に着くや否や、兵卒の検閲を名として、先ず妻のヘレネを先発として城へ帰した。トロヤで捕虜にした女十二人がパンタリスの指図の下に彼女につけられた。

下界から呼び活けられたヘレネは丁度その時のヘレネになって居た。歴史家の計算によるとその時からファウストの時までは凡そ二千年を経過して居るのであるが、その長い歳月の懸隔も此の場合には一瞬間に等しかった。彼女は航海中の夫の不機嫌を思い出した。一つ船に居りながらも笑顔一つ見せるでもなく、況(ま)して優しい言葉等はかけようもしなかつた。そうして、

『お前は先に帰って場内にある宝を調べて見ろ。それから年をとた取締役と一緒に残して置いた女中どもの人数をも改めて見い。何もかも相違なく整理してある筈だから。それから神聖な祭りをする時に必要な道具と人数とを取り揃えて置くのだ。特に犠牲(いけにえ)を供えるに入用なものを忘れてはならない。鼎、鉢、平たい円い籠、清浄な泉から汲んだ清水を入れた頸の長い瓶と、火つきの早い乾いた薪とが用意されなくてはならない。それからよく研ぎすました上等の鉞(まさかり)も忘れてはならない。その他の

ことはお前が見計らいに任せる。』

と云った夫が、不思議にもオリムポスの神様に捧げられるその犠牲(いけにえ)のことを、---その犠牲が何であるかと云うことを---一言も云わなかった。ヘレネは多少それが気に懸からないではないけれども、総てを神々に任せる心持ちで、オイロタス河に沿うて広い牧場を越え、美しい耕地の間を通過して、高い塔の立っているこの城までやって来た。そうして昔懐かしい思いと、幾分の気味悪さとで、それでもツォイスの神の娘らしい威厳と勇気とを失わずに城の中へ入って行った。しかし其処には実に思いがけない者が彼女を待ちうけていたのである。ヘレネは勝手を知った場内へ入って、人のけはいもしない廊下の薄暗がりやを怪しみながら、籠の置いてある辺りに近寄って見ると、消え残って居る微温(なまぬる)い炭火の光で、床の上に人らしいものの蹲踞(うずくま)って居るのが見えたので、もしやこれが留守居の女の頭(かしら)ではないかしらと声をかけて見た。それは真っ黒い布で覆面をした大きな女で、着物の襷(ひだ)の中に埋もれたまま声をかけられても動こうとさえしないのであった。ヘレネは少し腹立たしくなって階段の方へ向きかけた。其処には夫婦の座る筈の椅子があって、其の背面は宝蔵になって居るのである。すると矢庭にその怪しい女は立ち上がってヘレネの行く手に立ち塞がった。その痩せさらばいた変な恰好、空虚な血走った眼、世界中の醜悪を一身に集めてもこれ以上ではあるまいと思ふ程の醜さ。物事に恐れぬ流石のヘレネも、余りのおそろしさに驚いて思わず戸外へ引き返したのであるが、その怪しい女も後をつけて出て来たのである。それが即ち闇の女フォルキアスの姿を借りたメフィストフェレスであった。メフィストは問われるままに自分の履歴を偽ってヘレネ一行に語って聞かせた。その言う所に従うと、自分はヘレネの不在中にメネラス王に捕らえられてクレタ島から来た女達の一人であるが、王の信用を得て今では女中頭として、留守中の一切の取締役になっているというのである。

其処でヘレネはフォルキアスに化けて居るメフィストに祭壇の用意を命じた。メネラス王の命令通りにしなければならぬからである。メフィストは即座に答えた。

『それはちゃんと用意が整って居ります。鉢も、五徳も、よく斬れる鉞(まさかり)も、洗う水も、焼く火も、統べて準備は整っております。それで犠牲(いけにえ)になさるものは何だか御存じでございませうな。』

ヘレネは答えた。『いいえ。それは王様が被仰らなかつたので。』

『ま、左様でございましたか。それは笑止千万なこと。』

『なにをそう気の毒がるのだえ。』

『でも、その犠牲にはあなた様を供えることに定まって居ります。それから御一緒に参った女どもも。』

ヘレネは愁然としたが、悪びれずに云った。『もしかしたらそんなことではあるまいかと思つていました。』

『どうも致し方はございませぬ。鉞でお斬られなさることになっております。』メフィストのフォルキアスが答えた。

『まあ、どう致しましょう。』それまではフォルキアスの醜いのを罵ったり笑ったりしていた女たちは俄に周章狼狽(あわてふため)いた。それをよい気味だと云わぬばかりにフォルキアスが云い放った。

『お后(きさき)様は上品な御最期を遂げられるが、お前方はあの梁(はり)から、鶯(もち)にひつついた鶯(つぐみ)のように釣りさげられるのだよ。』

それを聞くと女たちは刈られた牧場の草のように萎れてしまった。斯うした惨(いた)ましい死が自分たちを待ちうけて居ようとは、今の今まで夢にも思わなかつたからである。彼等はそれまで軽蔑したり嘲笑したりしたフォルキアスに救いを求めるの外はなかつた。女たちの頭のパンタリスは少し媚びるような調子でこう云った。

『ねえ、お前さんは賢くもおありだし、経験もおありだし、それに親切もおありのようだが、どうかしてお后様を始め皆が助かる方法はないものかねえ。』

メフィストフェレスのフォルキアスは心の中で策略の成功を喜びながら答えた。『そ

れは無いことはない。だがお后様のお心一つ、御決断一つによるというものさ。』

ヘレネはメネラス王が自分に対してそれ程残酷であろうとも信ぜられないのであるが、よしそうだとし最う死をば少しも怖れはしない。運命ならばそれに従順であろうと思っている。しかし遁れられるものなら遁れてみようと思つて、試みにフォルキアスの言葉に耳を傾けた。フォルキアスのメフィストはメネラス王の不在中に附近に城塞を築いたファウストの事を物語つた。そしてその城の堅固なこと、その人物の卓抜であることを賞揚した。そして若しヘレネがファウストに一身の安危を託されたら、彼は喜んでヘレネを救うに決まると附加したのである。彼は一面死を以てヘレネを脅かして置いて、他面では甘言でこれをファウストと結びつけようとして居るのである。

そう云つて居る間に遠くから喇叭の音が近づいて来た。恐らくはメネラス王の帰着を知らせるのであろう。危機は目睫(もくしょう)の間に迫つて来た。決断は瞬間を争うのである。ヘレネはフォルキアスを顧みて云つた。

『ええ、私は差し当たりしなくてはならないことを考えた。お前は悪魔だ。それは知つて居る。そして善い事をも悪い事に変えるだろうと心配ではあるけれど、兎に角その咎まで私を連れておいで。其の他の事は胸の中に置いて誰にも云わないことにしよう。后(きさき)の心に蔵(しま)つてあることは、一々人に知らせる必要はないのだから。』

メフィストの案内で一行のものは直ぐにメネラスの城を後にした。それまで晴れやかに照つて居た日は急に曇つた。オイロタス河からは帯のように霧が立ち上がつて、緑の葦の美しく生い茂つた河岸も見つ間に消えてしまった。一行は歩いているのか、浮いているのか解らないような心持ちで、何時の間にか、中世風の空想的な建物に囲まれた城砦の中庭に来てしまったのである。こうして古代希臘の美の女王は、中世浪漫的の真ん中に入つて来たのである。

## 七 浪漫的の女王

ファウストの城砦では、不思議な程遠目のきくリンケウスと云う男を望樓の番人にして、周囲のあらゆる形勢を覗(うかが)わせて居た。高い大空、広漠な平野、常人には見難いものも彼には掌(たなごころ)を指すように見ることが出来る。遙かな丘を超えて通るものが牧畜の群れであるか、或いは軍隊であるか、天の一角をかすめて飛ぶものが征矢(そや)であるか、または鳥であるか、彼は一々それを知つて必要な報告をする役目を帯びて居た。それ故ヘレネ一行の到着をもリンケウスは逸早く見つけてそれをファウストに知らせなければならなかつた筈である。しかし今度に限つて彼はその役目を忘れてしまったのである。彼は遠く東の空を望んで昇ってくる太陽の歩みを見ていると、突然南の方から日が出て来たように思つた。ヘレネの美しい姿が彼の眼を眩ましてしまったのである。彼は野を見、丘を見、谷を見、天地の遠い境を見る番人の義務を全く忘れてしまつて、未だ曾(かつ)て目にしたことのない美に心を奪われた。それは独り望樓守(ぼろうもり)のリンケウスばかりではなかつた。不意に来た此の美しい女客を見た城中のものは、老いたものも若いものも、優しい者も勇敢な者も、悉く新来の女王に心を傾けて、其の為には忠節も忘れ、身命をも惜しむまいという気色を見せたのである。

中世騎士の美しい宮中服に身を飾つたファウストは城内のものを従えてうやうやしくヘレネを出迎えた。その品位とその温容とその威儀とは先ず女たちの讃嘆を買うのに十分であつた。彼は鎖で縛(たば)めたリンケウスをヘレネの眼前に引き据えながら云つた。

『莊重な御挨拶、敬意を表した歓迎の代わりに、職務を忘れて主人の義務までも果たさせずにしまいました此の家来を鎖につないで参りました。この男が茫乎(ぼんやり)して居りました為にお出迎えが遅れましたことを御許し下さい。そして此の男を罰するなり赦すなり御自由に処分していただいきましよう。』

リンケウスは跪いて自分の罪を謝した。そして譬え殺されてもヘレネの命令なら喜んで死ぬことが出来るといつた。ヘレネは静かに答えた。

『まあ、御家来の裁判を私にお任せになるとは、大した権力を私にお貸しなさるのですね。しかし私の身から起こった罪をどうして私が罰せられましょう。本当になんという残酷な運命が私につき纏っているのでしょうかね。あらゆる男の心を迷わせて、身をも務めをも忘れさせ、一度ならず、二度も、三度も世の中を乱して、数知れぬ禍の種となるというのは。----どうか此の人は赦してやって下さい。』

リンケウスは喜びの余りに、その持って居る総ての宝物をヘレネに献じようとしたが、それは直ぐにファウストに斥けられた。

『それには及ばないのだ。今から我々の持っているものは悉く此のお后様のものなのだ。国土も、城塞も、軍隊も、人民も、財宝も。』

斯うしてファウストはヘレネを女皇とし、支配者とした。希臘古代美の半神は、今中世浪漫的王国の統治者とあがめられることになったのである。そうしてファウストはヘレネの傍(わき)に座って、境界も知れない美の国の共治者となり、ヘレネの為には崇拜者と従者と番人とを一身に兼ねている人となったのである。ファウストがヘレネに受ける幸(さち)の多いことは言うまでもない。ヘレネもまたファウストに学ぶ処がある。こうして此処には古典の精神と、浪漫的の精神との融合中和が実現されたのである。二人は王座の上で肩と肩とを寄せ、膝(ひざ)と膝とを合わせ、手に手を取って、時処を忘れた恍惚裡に、互いに織り交ぜられた糸のように感じていたが、その甘い夢も間もなく喇叭の声で破られた。メネラス王が一軍を率いて押し寄せて来たのである。しかし此の王国には何の危険もなかった。危険に見えるものも徒らな威脅に過ぎなかった。城内には勇士の群れが集まって居た。命令一下、華々しく武装した一騎当千の人々が部署についた。

『隊長たち。お前たちに私から挨拶する。お前たちを指揮するのはスパルタの後(きさき)だ。山野を略取して後に献じて貰い度い。国内の所得は皆お前方のものにする。さあ、ゲルマアネの槍づかい、お前は堡壘によってコリントス湾を守れ、ゴオテの勇士はアハイアを防げ、フランケの軍はエリスへ進軍せよ。メッセネはザックセに一任する。北方のノルマンネは、海上を掃蕩してアルゴリスの港を経営するのだ。』

各部隊は直ぐ進発した。メネラス王は海上遠く逐い払われた。ゲルマン、ゴオト、フランク、ザックス、ノルマンの民族に守られて、欧羅巴の山脈の一端、丘陵の帯で繋がった半島の国希臘が支配している。ファウストは心からの満足を表わしながらヘレネに云った。

『ね、此の国はあなたの方へばかり向いて光栄の眼を見せて居ますよ。全世界があなたの物になっても、特に本国をお愛しなさい。泉の湧く丘、小川の流れ落ちる谿谷、断続する丘陵の上には碧い雲が広がって渡ってゆく。緑の萌え始める山路を歩いてゆく牛や羊の群れを御覧なさい。それを守るパンの神、爽やかな谷間の生の少女(おとめ)ナペアイ。静かな木蔭から迸(ほとばし)る甘温(ぬる)く甘(うま)い乳、木の幹を滴る蜜。ここでは健康が遺伝します。頬も唇も晴々しくなる。人が皆不死になるのです。此の清浄な日の下で、やさしい子供が父の力を得るように育ってゆく。そうして我々はそれに驚いて、一体これは神なのか人なのかとの問いを決することが出来ない。だからアポロンの神は牧者の姿に作られたのだ。一番美しい牧者はアポロンに似ていた。自然が最も純潔な時には、総ての世界が相互に交感するものだからねえ。』

斯んな風にファウストは美の国に没入した。彼は一切の過去を投げ捨てた。第一の世界に属しているものは、ヘレネだけ、美だけだと彼には思われたのである。

## 八 愛 児

ファウストとヘレネとの間にはやがてオイフォリオンと名づけられた子が産まれた。オイフォリオンとは豊饒という意味と共に敏捷という意味をも持って居る名である。そうして親子三人は俗塵を離れてアルカディアの幽居に幸福な日を送り迎えた。岩石の畳み重なった間に老樹が彬々(ひんぴん)として聳えていて、それがまた人の住むことの出

来る家を作っている。実に自然が成せる楽園である。

『ほんとうに人間らしい幸福を作る為に愛は二人を近づけるのですが、神のような喜びをさせるには三人の組を作るのですね。』

ヘレネはファウストを顧みてこう云った。夫婦の間に子供が出来て、愛は初めて神々しいものになると思ったのだ。

『うむ。これで解決がついたのだ。私はお前のもので、お前は私のものだ。こうして緑が繁っている。』

しかしオイフォリオンは生まれ落ちるから快活で、しかも常に高く飛びあがろうとして居る。宛然(まるで)地に産まれた神のアンテウスでもあるかのように、足が地につくと直ぐに力を得て、跳ね上がらずにはいられないのである。そうして岩石の間をはじかれた毬が飛ぶように跳ね廻って歩いた。その為に或る時は恐ろしい岩穴の中へ落ち込んで、もう助からないのかと思われたこともあった。ヘレネは悲しみの為に泣き出す、ファウストはそれを慰める。一事は大騒ぎであったが、間もなくオイフォリオンは谷の底から飛び上がって来た。しかもその谷には珍しい宝でもかくされて居るのか、今度は花模様に飾られた美しい着物をきていたのであった。それでいつも彼はこう云っていた。

『私を飛ばせて下さい。私を跳ね上がらせて下さい。どんな高い空中へでも昇ってゆくのが私の望みですから』と。丁度文芸勃興時代の気象を示し、英国の詩人バイロン卿に似た所を持って居た。ファウストは自分の一面の性質をうけついで居るような、そうした我が子の振る舞いを眼前に見せつけられて、心にくくは思うものの、一途に高きを望み、一気に総てを得ようとする事の危うさを教えずには居られなかった。

『好い加減にするのだ。よい加減にするのだ。落ちると怪我をする。そうして私たち夫婦の幸福を破らないようにしてくれ。』

彼はそう云って我が子を誠(いまし)めた。

『いいえ、もう此の土地に止まっていたくはありません。私の手や髪や着物をつかまえないで下さい。皆私のものじゃありませんか。』

ヘレネも口を添えた。

『いいえ。自分が誰のものか考えて御覧。お前一人のものじゃなくて私たち三人のものですよ。それをお前が毀(こわ)したらどんなに私たちが嘆くかということを考えて御覧。』

『両親(ふたおや)のために余り活澆過ぎないように、余り烈し過ぎないように気をつけておくれ。控え目に静かにしておくれ。』

二人はいつもオイフォリオンに斯う云っては頼んで居た。嘗て一切か無かを望んで、驀然(まっしぐら)に地霊に面接しようとし、一転して悪魔と契約を結んだファウストの心の中に、如何程の大きい変化が起こったかということが知られるではないか。均整の中、制約された形の中に一切の存在の価値を示すものが即ち希臘の精神であり、ヘレネによって体現させられた真理であった。何でもあれ、心から出さえすればよい、心持ちが一切であると信じていたファウストも、ヘレネとの共棲によって、オイフォリオンの出産によって、制約の必要、節制の意義を会得して来たのであった。

しかし若い血のたぎって居るオイフォリオンにそれが同感されようはなかった。彼は自分の力で一切を征服しようと思った。遠い波濤の声、遙かに響く風のざわめきが、彼を広い世界高い世界へ塵(さしまね)いた。彼は平和の楽しみよりは戦いの喜びを希(こいねが)った。その後から来る勝利の歌声を思った。

『掩堡(えんほう)もなく、墻壁(しょうへき)もなく、各人自信の力で進んでゆく。最もよくこらえる墨壁(はがね)のような男児の胸だ。人に侵されずに生きようと思うものは戦場に出なくてはならない。』

オイフォリオンは運命の力に引きずられるように、両親の止めるのも聞き入れずに、遂に大空を目がけて飛び上がったのである。見上げる碧空には暫くの間雲のような衣装

が彼の身体を中空に支えて居るのが見えた。彼の頭からは光が発し、其の背後には彗星のような長い尾が曳いて居た。それも暫くであった。やがて美しい少年がファウストとヘレネの足元に落ちて来た。ああ屍かと思う間もなく其の形骸は消えてしまって、尾を曳く星のように毫光(ごうこう)が天に昇って、後には着物と袍(ぬのこ)とリラの琴とが残った。ヘレネとファウストとは同時に云った。

『ああ、喜びの後から直ぐに恐ろしい痛ましさが来た。』

其の時どこからともなく子供の声が叫んだ。『お母様。私をこの暗い国に一人で置かないで下さい。』

オイフォリオンの死はやがてまたヘレネを此の世につなぐ絆の切断であった。彼女は「美と福とは長く一緒になって居ない」という古い諺を痛切に思い合わせながら、下界へ帰って行かなくてはならなかった。愛の力ももうヘレネを止めることは出来なかった。

『お別れにもう一度寄り添わせて下さいまし。』

こう云ってファウストの胸に抱きついたかと思うと、体はいつの間にか消えて、ファウストの手にはただヘレネの衣装と面紗(めんしゃ)とばかりが残ったのであった。ファウストはそれをしっかりと手に握って放さなかった。よしや美はいつ迄も地上に止まって居ることが出来ないにしても、しかしその残した神々しい跡は永久に消えてはならない。その尊い啓示と恵みとは計量を許さない程大きい。それにすぎり、それを力にして、あらゆる卑しい境を脱して、瀨気(こうき)の中を向上の路に進まなくてはならない。果たせるかな掌中の衣装は散じて雲となるや否や、ファウストを包んで空に上(のぼ)らせた。ファウストは雲に乗って遠くへ飛んでゆく。メフィストフェレスのフォルキアスはそれを見送って、

『いずれまた遠い遠いところで御目にかかりますよ』と云った。ファウストは未だメフィストから全くは離れてはいないのである。しかしこれ迄にでも既に解るように、初めはメフィストの導くままに大方従って居たファウストも、グレチヘンとの恋愛を経、所謂大天地の閱歴をし始めてから、漸次に独立的になって来て、メフィストの勢力が日に日に小さくなって来たことは明らかである。初めは道案内者であり、指導者であったメフィストが、今はもう侍女の役目に落ちているのである。

さてヘレネは何処へ行ったか。それは言うまでもなく下界へ帰ったのである。半神ともいう可き彼女は、地下の世界でも心安く、ペルセフォオネの側に、他の女皇たちと一緒に永遠の座を受けることが出来る。しかしヘレネに従って来た十二人の女たちは、名をあげたでもなく、優れた事業をしたでもないのだから、永遠の生命を下界で送ることは不可能である。魔法の綱がきれると一緒に自然に帰ってしまったのである。ある者は水になった。あるものは木になった。又あるものは山になる。或いは葡萄畑になった。そうしてメフィストはフォルキアスの面を脱ぐと共に、ファウストの後を追って北方の空へ飛んで行ったのである。

## 九 高 山

晴れた日だった。空は瑠璃のように澄み輝いていた。その下に横たわる大きな海、それに続く陸地、眼に映るものは悉く明らかな形象を彫(きざ)んでいるような日であった。ファウストを乗せた一団の白雲は静かにその間を渡って、やがてとある高山の一角の、屹立した巖壁にたなびき寄って、その巖の突出した段の上に彼を降ろしたのである。ファウストは斯うして希臘の地を離れて再び北歐の地----恐らくは独逸----へ帰ったのである。

彼は自分を運んできた雲の一団が、散りもせずゆっくりと身を離れて、列をなして東の方に漂ってゆくのを、驚きの眼をあげて眺めやった。雲は動いて、破れて、形を変えた。そうして見る間に一定の姿に纏まってゆくのである。見れば、日に照らされた褥(しとね)の上に美しく体を横たえて、巨人のように大きくはあるが、神々に似た姿をした女が現われている。ユニか、レダか、ヘレネか。----ファウストは自分の味わった希臘古代文明の精華を心に呼び起こしながら、遠い氷山のように、日にかがやいていざっ

てゆく雲のたたずまいに暫く見ほれて居たのであった。

彼はまた自分の額や胸の辺りに薄い明るい霧が漂って、優しく冷たく心地を爽やかにしているのを感じていた。それが今たゆたいながらも、次第次第に空に昇って、一つの形に纏まってゆくのである。彼はそれを見上げながら、眼のまよいではないかと怪しんだ。其処には若かった日の無上の姿が、恋人の姿が、グレチヘンが見えたのである。心の奥に最も早く出来た宝の数々が迸(ほとぼし)り出して来た。彼は、解けずに瀬気(こうき)の中に昇ってゆく其の優しい姿の美しさが、雲の美のように増してゆくのを飽かず見つめながら、自分の心の中の最前のものが一緒に持ち去られてしまうように感じたのである。実際ファウストがこれまで経て来た生活の頂点とも見る可き高山の絶頂に立って過去を顧みた時、心に深く刻まれて忘れ難かったものは、美の権化のヘレネと、恋の化身のグレチヘンとであったのである。

ファウストがこうした過去の美しい追憶に耽っていると、そこへひょっくりと、七里靴を穿いたメフィストフェレスが現われた。

『これなら随分歩いたと云えるだろう。ところであなたは何だってこんな不気味な場所へ降りたんです。此処は昔地獄の底だったんですぜ。』

ファウストは苦々しそうに云った。『君は何につけても、そんな馬鹿気たお伽噺を知っていて、こんな場合にもそれを云い出そうとするのかい。』

『そういう訳じゃありませんがね。私共はそれを昔見ていたんですからね。』

二人は世界の成立について、火山論と原水論とを戦わしたが、メフィストはやがて話題を他へ転じて来た。

『まあそれはそうとして、此の地球の表面はあなたのお気に入りになりましたか。あなたは兎に角世界の立派さ加減を随分広く御覧になった訳ですよ。しかし、何につけても満足ということを知らない先生なのだから、これなら欲しいというものは無いでしょうな。』

皮肉な笑いを強いて噛みつぶしたようなメフィストの顔を見かえりながらファウストは答えた。

『ところがある。大きいものが己の心を牽いた。何だか当てて見給え。』

『それは造作もありません。』メフィストは言下に答えた。彼は人間の願望は嗜欲(しよく)の満足以外に出で得ないものだと思っている。それ故彼は先ず巴里の反映を想わせるような都会の盛況を説いて、その中心となる君主の悦をあげる。次いでヴェルサイユの宮殿を忍ばせるような驕奢(きょうしゃ)の生活を語って、権勢を擅(ほしいまま)にすることの楽しみを数える。更に女色に耽ることも挙げることを忘れはしなかった。しかし之等の何一つもファウストの心を動かすに足りるものではなかった。

『では見当がついて来ましたね。大方天上界へでも心をひかれたのでしょうか。』

『大間違いだ。此の地上にまだ偉大なる事業をする余地がある。驚嘆に値することが成就しなくてはならない。私は大胆な努力をする力を感じている。』

『では名声を望んでいるんですね。』

『主権を得るのだ。占有だ。事業が一切だ。名声はいらない。君なんかには人間の願望はわからない。』

メフィストはどぎまぎしながら云った。『それはどうでもいいんです。あなたのお望み通りにしましょう。それであなたの気紛れの望みというのは。』

ファウストは語り出した。彼は雲に乗って飛行している中、常に心を海の戯れにひかれていた。水が湧き立って盛り上がった。そうしてそれが低くなると思うと、波が平らな岸の一角を襲った。それがファウストの心をいらだたせた。波は不生産的である。その力を擅(ほしいまま)に逞しくした後に残るものは何一つないのである。云わば喜怒哀楽の感情の荒(すさ)びにも似ている。斯うした無検束、無目的な自然力と戦って、これを征服し支配する人間自由の精神を發揮したい。ファウストは実にそういう大きな感激にうたれたのである。波は氾濫する性質を持って居る。ファウストはつくづくと波の振る舞いを観察しながら、海波征服の計画が漸次に自分の胸臆の中に熟してゆくのを覚えた。彼は専横

の波の戯れを遠ざけて、其処に安全な新しい地を作り度いと思ったのである。そうしてそれが決して不可能ではないと信じ始めたのである。海波の征服。新領土の占有と開拓。これが今ファウストの心を占めて居る唯一つの望みであった。

『これが私の望みだ。この望みをかなえなくてはならない。』

ファウストの此の望みの背後には実に深遠な意義が横たわっていた。彼がメフィストと共に新しい生活を始めた当初から、彼の凭(よ)り頼んだ所は、その終局の帰趨としたところは、常に大自然であった。彼はこの意味で自然汎神論者だった。自然の総てが神である。或いはまた神の現われが即ち自然である。彼は斯ういう信条の下に、総ての在るものを正しいとして肯定して来た。それ故にこそ悪魔のメフィストとも提携し、自己に何等の検束をも加えないで、不羈奔放な生活を逞しくして来た。そうしてファウストは結局それに満足することが出来なかったのである。その間に至真の恋愛は彼により高い霊の世界の存在を示した。希臘古代の美は彼に制約と調和との必要を教えた。勢い彼の思想にも変化が来なくてはならなかった。勿論これによって、ファウストはその根本的信条である自然汎神論を捨てようとしたのではない。ただこれを一層人間的にし、一層倫理的にすることの必要を学んで来たのである。自然の力を無目的であらせてはならない。無検束であらせてはならない。人間は勿論自然の一部である。其処には自然の法則が支配しなくてはならない。しかし同時にまた人間は自然の全体ではない。人間を支配する自然力は、おのずから又人間的な意義と検束とを持たなくてはならない。海波のすさびにも等しい嗜欲享樂の導くままに人間を任せて置いてはならない。「受用享樂は人間を卑俗にする。」高遠な意志を胸に畳んで支配命令しなくてはならない。彼が海波を退けて新陸地を占有しようとする望むのは、一面から見ると自然汎神論に一種の制約を加えて、人間的倫理的汎神論にしなくてはならないという思想の展開を語って居るものであり、他面から見るとメフィストの与える享樂受用の世界から離脱して、人間本来の独立的支配に帰り、理想向上の一路につこうとする傾向を明らかに語っているものである。ファウストがメフィストに遠ざかろうとする心は、こうして愈々熟してゆくのである。

悪魔に人間願望の真意が解ろう筈はない。メフィストはファウストの望みをきいて直ぐ答えた。

『それは造作もないことです。そら遠くに鼓(つづみ)の音がきこえるでしょう。』

果たして右後ろの遠方から鼓の音と、軍樂の響きが聞こえて来た。ファウストは眉をひそめた。『また軍(いくさ)か。好ましくない響きだ。』

目的の為に手段を選ばないのが悪魔の常法である。凡ての邦土は帝の所有である。海中の地と雖も帝の許可なくして占有することは出来ない。それ故折柄の戦争を利用してメフィストは帝から一帯海面の地を得ようと企てたのである。

帝の弊政の結果は終に多くの謀反人を蹶起(けつき)させた。そうして彼等は新帝を擁立して戦争を始めたのである。彼等の要望するところは正義と善政と平和である。僧侶等は蔭に廻ってそれを扇動した。諸侯は形勢の重大なのを知って、袖手(しゅうしゅ)傍観している。そうして容易に帝を助けようとはしないのである。その為今帝は最後の決戦をしなくてはならない危機に瀕して居るのである。メフィストは喧嘩坊(ラウフボルト)、早取(ハアベバルト)、堅持(ハルテフェスト)の三人を呼び出して、それを伴ってファウストと共に帝を助ける為に出かけるのである。之等の三人は年齢も区々で、服装も別々であるが、其の名の示すように、一人は喧嘩好きの命知らずであり、他の一人は掠奪の恐ろしく敏捷な男で、堅持(ハルテフェスト)は手に入れたものを決して他人に渡さないという自信がある。戦争には何れも一かどの役に立つ者どもであろう。斯うして都合五人は高山を降りて、麓の方、帝の陣営に赴いた。

## 十 戦 争

帝はその陣地を一帯の丘陵を背にした平地に取って居る。右翼は波のようにうねった丘で、それは余り峻(けわ)しくもなく、そうかと云って、勿論行進しやすい地形ではない。敵の騎兵にとって極めて不利で、味方にとっては概して有利に見える。左翼は嶮岨

な岩山で、其処には僅かに隘路が通じて居る。その隘路を扼しているから此の方面は全く安全だと云ってもよい。帝は此処で最後の決戦をしようと思つて居るのである。実は此の地形を得る為に帝の軍勢は或る程度の背進を余儀なくされたのであった。帝には戦闘の勇氣はある。しかし全軍を指揮統率する器量はない。総てが將軍任せである。其処へファウストの一行が馳せ参じて味方になった。帝は勿論喜んで一行を迎えたのである。

帝軍の右翼は中央部隊の助勢によって敵を漸次圧迫した。しかし嶮岨を頼んで居た左翼が却つて敵の猛烈な攻撃にあつて敗北し始めたのである。帝はファウストやメフィストを味方にしたことを後悔し始める。全軍の指揮を引き受けて居た將軍も其の責任をメフィスト等に転嫁しようとする。メフィストは終に事実上の全軍の指揮者となった。彼は怪しい二羽の鳥を呼び出して種々の幻術を行うのである。彼は先ず山の湖に鳥をやつて、「水の影」を借りて来させる。そうしてそれを嶮岨の上から落とすのである。敵兵は實際の水が俄に岩石の間から湧き出したのに驚いて、泳ぎ溺れるような容子をして逃げ迷う。そればかりではない。地下に住んでいる侏儒(しゅじゅ)の鍛冶のところへも鳥を使いに来て、火花や、稲妻や、星を借りて来させて、それを敵軍の眼前に撒き散らした。加うるに喧嘩坊(ラウフボルト)と早取(ハアベバルト)と堅持(ハルテフェスト)の三人は味方の先頭に立って勇敢な戦い振りを見せたので、それに励まされた味方の兵は、幻術で眼の眩んで居る敵軍を間もなく潰乱(かいらん)に陥(おとし)入れたのである。こうして決戦は終に帝の大勝に帰してしまつた。偽帝は僅かに身をもつて何処へか遁れなくてはならなかつた。

幻術の力で僅かに勝つことの出来た帝は、それをも自分の力でなし得た勝利のように思つて居る。そうして国家を危うくした旧制度を再び戦後にも建て直した。それは分権と、寺院政治とである。帝は自分に従つて居た諸侯に国土を分かち与える許りか、諸侯はその土地に於ける最高権の所有者とされる。領土の譲与、買い受け、交換、拡大の権利、司法立法の権、貨幣鑄造、税金の徴発まで、自由にすることが出来るのである。更にまた帝の百年の後には其の後継者を選出する権利さえ与えられる。帝は斯うした分権が、やがて帝室の実権を弱める所以であることを知らない。そのみならず、帝はまた大司祭の言葉をきいて、寺院に莫大な領土を寄附した上、寺院の建立を約し、多くの財宝をこれに奉獻することにした。斯うして帝は兎に角その位置を回復することが出来たのであるが、ファウストに対する恩賞としては、望みに任せて、海中に横たわつて居る一帯の地を与えた。ファウストは其処を埋め立てて、旧制度の支配する古い地から全く独立した新しい国を建設し始めたのである。

## 十一 老夫婦

多くの歳月が過ぎ去つた。ファウストの計画は着々と実行された。埋め立てられた広大な新土の上には植民された人民が新しい生活をたてた。もう百歳に近づいて居るファウストは宏壯な宮殿を構えて、王者としての器量と品格とを示して居る。メフィストは彼の臣下となり、多くの召使いの監督として仕えて居るが、主として船を持って海外に出て、貿易に従事して居るのである。彼は三人の力強い男と共に常にファウストの命令を聞いて居るのであるが、海上へ出た彼の振る舞いは必ずしも正当ばかりではない。貿易と称して実は掠奪を敢えてすることも少なくはないのである。「暴力のある所に正義が帰する」とメフィストは今も未だそうした信条を持って居るのである。卿も亦彼は三人の力強い男と一緒に二十艘の船舶を持って来た。海から宮殿へ通ずる運河に船を入れて、出てゆく時には僅かに二艘だったものが、今は十倍になったことを誇りとしている。しかしファウストはそのようにして得た財宝をば少しも喜ばない。

『どうしたのでございます。あなたは私共の素晴らしい成功の話を、響めっ面をしてお聞きになるのですね。遠大な智謀の結果として、岸と海との調停和親が成立して、陸を離れる船を海は喜んで引き受けるし、あなたは此処の宮殿に座つていて、全世界を掌(たなごころ)にしていると云つてもよいのです。此の大成功の出発点は此処でしたね。此処から私たちは着手したのでしたね。』

メフィストは媚びるように、それからまた自分の力を誇るように斯う云って、ファウストの顔を見上げた。ファウストは面を伏せながら云った。

『うむ、その此処が詛われているのだ。それで私は苦しくて仕方がない。もう辛抱が出来きれない。口にするのも実に恥ずかしいのだが、実はあの丘の上に居る老人夫婦を立ち退かせて、あの菩提樹の蔭に住みたいのだ。あの幾本かの樹木が私の心を傷つけるのだ。私はあれを自分のものにしたい。私はあの木の枝から枝へ足場を作らせて、十分に展望のきく望楼を構えさせて、その上から自分の仕事を一と目に見下ろしながら、人民の安堵するような政治をしてやり度いのだ。実際富を得て居ながら欠けたことを思う程苦痛なことはない。』

ファウストは長大息をした。

『そうですとも、それは面白くないでしょう。』メフィストは相槌をうった。

『どうも片意地にああ反抗されると、自分の成功も萎(しな)びて見える。その為(ため)に正義の心までが疲れてしまう。』

『そうですとも、何の遠慮もありませんよ。あの爺婆を新開地へ移しておしまいなさい。』

『さあ、それは前にも云い出して見たことで、あれ程立派な場所と交換しようとするのに聞き入れないのだ。兎に角もう一度行って最後の談判をしてみてください。』

『ようございます。そっと引きさらって行って据えて置けば、直ぐ新しい地に馴染んでしまいますよ。圧政を受けた後で一層美しい住居を見ると、却って悪くはなりません。』

メフィストは直ぐに三人の力強い男を連れて老夫婦の許へ出て行ったのである。

ファウストが気にしている老人夫婦というのは、昔海岸であって、今は海から遠く隔たって居る一つの丘に住んで居た。翁(おきな)の名はフィレモンといい、媪(おうな)はバウチスと呼ばれている。其処には古い菩提樹の林が立っていて、茶色に塗られた夫婦の家の傍(そば)には小さい礼拝堂がある。朝夕そこからは鐘の音が聞こえるのである。ファウストは、其の鐘の音を耳にする度に、突然背後から矢を射かけられるように心を傷つけられずには居られない。そうして頑固に立ち退きを肯(がえ)んじない二人を思い起こすごとに、自分の力の限界を感じて不愉快に耐えられない。それによって自分の領土が不浄にされるように思うのである。それが眼の中の棟、足裏の刺(はり)のように痛い。

丁度メフィストがファウストの命令をうけて、最後の談判に赴いた夕暮れに、フィレモン夫妻の所には一人の客があった。それは昔この辺が未だ海であった頃、難破船の不幸にあって、此の老夫婦の小舎(こや)に救われたことのある一人の旅人だった。彼はその時の困苦を思い起こすと共に、親切に自分をいたわってくれた老夫婦に対する感謝に涙ぐまずにはいられなかった。彼は昔ながらに立っている菩提樹の下の茶色の小舎を見る許りか、もう此の世には居ないかと思った老夫婦を見ることが出来て、此の上なく喜んだ。そうして昔難破の厄に遭った海をもう一度眺めやっけて砂上に跪いて心からの祈禱をしようと思った。しかし昔の海はもう其処にはなかった。

『荒波が飛沫をとばして、あなたを災難にあわせたあの海が、今は花園のようになり、天国のようになってしましよう。私ももう年を取ってしまって、昔のように人を救うことも出来ないが、私が年をとると一緒に、海も遠く退いてしまった。賢い殿様の御家来たちが、溝を掘り、土手を築いて海を狭めたのです。牧場、草刈場、畑、森、村落の美しく列(なら)んで居るのを御覧なさい。そらもう日が入りますね。あの遙か向こうに夕日に染まって光って居るのが船の帆です。夜の港を探しているのでしょうか。地平線の遠方に緑のように輝いているのが海ですよ。』

フィレモンが旅人にこんな説明をしている中に、バウチスは客の為に夕食の支度を花園の中にしたのである。平和に充ち溢れた夕暮れだった。客が望むままにバウチスは新しく出来た土地の工事の有様を話した。そうして此の埋め立ての為には多くの人命も犠

牲にされたらしい上に、正しい人の眼には怪異と思われるような不思議が少なからず行われたことを物語った。

『不人情な殿様でしてね。私たちの丘や家を欲しがって居るのですよ。どうも向こうの威勢がすばらしいものだから、こちらは小さくなっているより仕方がないのです。』

媼(おうな)はそう云って嘆息した。『でも新しく拓(ひら)いた立派な土地を其の代わりに与(や)ろうと被仰(おご)るのだ。』翁(おきな)は慰めるように云ってみた。

『あんな海の底だった地面なんか。やはりこの高い処の方がどれ位よいか知れはしない。』

食事が済むと二人はお堂へ入って、夕日の名残を惜しみながら、鐘をついて昔ながらの神様に祈祷を捧げたのである。

メフィストが三人の力強い男と来た時には、戸は固く閉ざされて居た。叩いても叩いても内から開けようとはしなかった。朽ち果てて居た戸は間もなく打ち破られてしまった。こうして闖入したメフィスト達は、甘言と威脅とで交々(こもごも)夫婦に換地(かえち)のことを迫った。二人はどうしても肯んじない。終に暴力が行われたのである。老夫婦は無理やりに戸外へ引き出された。驚いて倒れた翁媼はその儘死んでしまった。見かねた旅人は憤怒の余り四人の暴行者に打ってかかった。しかしそれは何の役にも立たなかった。旅人も亦罪のない老人達と一緒に命を失ったのである。

此の騒ぎの間に炭火が周囲に散らばった。それが藁にうつった。屋根に燃えついた。小舎(こや)も礼拝堂も、菩提樹も見る間に真紅な火焰に包まれてしまったのである。

## 十二 憂いと死

メフィストフェレスの復命を待って夜を更(ふ)かしていたファウストは、思わずも遠くに焰の上ののを見たのである。窓に立って見ると、それは菩提樹の森からである。彼は心私かにメフィストに下した命令を後悔しているところへ、メフィストは半ば得意になって帰って来て、始終の顛末を報告したのである。ファウストは怒った。

『私の言葉が聞こえなかったのか。私は交換しようとは云ったけれど、強奪しようとは云わなかったのだ。無謀にも程がある。』

メフィストは恐縮して引き退いた。しかしこうした暴挙の責任は一人メフィストばかりの負う可きものであろうか。ファウストも自ら顧みて心に疚しい所が無いとは云われなかった。彼は暴力を以て老人を押し退けようとは思っていなかった。でも、其の移転を老人が好まないことを知っていた。そして知りながらも尚迫った。文化の展開の途上には、常に何等かの犠牲が払われるとはいえ、此の善良で敬虔な老人達が、罪もなく亡びなくてはならなかったということは、ファウストの心を著しく暗くした。彼は焼け落ちてゆく小舎の礼拝堂や、菩提樹の林の方を眺めて、暫く思いに耽っていた。火は漸次(だんだん)下火になった。夜風が起こって、煙をファウストの宮殿の方へ吹き靡(なび)かけた。其の煙に紛れて怪しい影が四つ現われた。それは灰色の女の姿をしていて、第一は不足、第二は罪、第三は憂い、第四は悩みという名である。彼等は怪異な身振りをしてファウストの宮殿に近寄りながら、小声で私語していた。

『戸がしまっていて入れませんね。』

『中には金持ちがいるんだから入りたくもない。』

『私奢(おご)っている人には顔をそむけるのよ。』

『あら、雲が出て来て星が隠れたのね。遠くから兄弟が来てよ。あの兄弟の死が。』

『さあ一緒にゆきましょうよ。』

憂いを除いた三人の女は皆去ってしまった。しかし憂いは一人残って鍵穴からファウストの部屋へ入ったのである。世の宝にも心の宝にも富んで居るファウストには不足も悩みも近づくことは出来なかった。総ての体験を凌いで不断の展開と向上の路にあったファウストには一つの罪も残っていない。罪は皆彼にあっては人間の進歩を導く光明に

化したのである。それ故罪も彼の戸口から足を返さなくてはならなかった。唯一人、あらゆる人間の伴侶として、常に種々の姿で人間に付き纏っている憂いばかりが彼に近づくことが出来たのである。

ファウストは一人部屋の中に座って深く考えに沈んで居た。彼は灰色の女四人の中、三人が帰ってゆくのを見た。そうして自分の周囲にまだ魔法の気の多分に付き纏っていることを残念に思った。彼は呪文の言葉を一切忘れて、自然の前に一人の男として立ちたいと思った。昔一介の学徒として傲慢な言葉で世をも己をも呪った頃が寧ろ懐かしく思われた。あの頃は兎に角怪異から全く離れて独立した男一人であったのだ。それが今はもうそうでは無くなった。よし昼の日が明らかに理性的に笑っても、夜がまた夢の網に自分を巻き込んでしまう。新緑の野から楽しく帰ってくると、鳥が「凶」、「凶」と啼いている。これではならない。彼はこんな風に考えて悪魔と全く手を切らなくてはならないと思った。丁度其処へ憂いの女が音も立てずに入ってきたのである。

『誰だ、お前は。』ファウストは答めた。『ここに居るものです。ここは私の居てよいところでございます。私は人間の居る所には何処にでも居る憂いです。あなたは憂いを御存じありませんか。』

しかしファウストは憂いに耳を傾けなかった。彼は自分の歩く道を確実に知っていた。区々たる憂いに心を労して行き迷うようなことはなかった。彼はこの世の中の深みを通って来た。そうしてあらゆる歓楽を、髪を掴んで引き寄せた。心に満たないものは突き放し、手を滑るものはうち捨てて、新しく望みをかけては、その望みを達し、更に望みをかけてはまた進んで来た。彼は天上に自分の姿を探すような愚かなことはしなかった。地上の生活の中に此の世の中に神の啓示を見ることが出来ると信じて居た。永遠の境にさまようには及ばない。自分の認識したことは手に掴むことが出来るからである。地上の如何なる刹那にも満足出来ないにしても、認識しつつ進んでゆくことは最上である。ファウストはその変化多端な、豊富な生涯の体験に基づいて、此の地上の生活に、或いはまた自身の中に神または永遠を認めるという確信に到達したのである。之はファウストが当初から、メフィストと結託した時から、持って居た傾向であったが、今は憂いもそれを動かすことの出来ぬ大きな信念となってしまったのである。

憂いはファウストに対して種々蠱惑するようなことを云ったのであるが、彼は終にそれに引き込まれては行かなかった。憂いは腹を立てて呪詛の息をファウストの顔に吹きかけておいて逃げ去った。彼はその毒氣にあてられて、盲目になったのである。

失明はしたものの、ファウストの精神の力はそれによって少しも衰えはしなかった。彼の心の火は愈々明るくなった。彼は思い立ったその事業を一時(とき)も早く完成しようと考えた。彼の開拓した国土の中には、未だ埋めきれない沼が山麓にあって、悪い蒸気を発散して、新しい国土を汚すことが夥(おびただ)しい。それは丁度まだ去りきれぬ悪魔の気、悪魔の影にも似ていたのである。溝渠を通じてその穢水(わいすい)を全く除いてしまうということこそ、彼の最後の仕事で、また最大の仕事でなくてはならない。ファウストは其の沼の全く乾いてしまった、悪魔の気の遠く去った未来を想定した。

『私は数百万の民に土地を拓いてやる。安全ではなくても、働いて自由に住まれる。土地は豊饒で草木が繁る。新開地には愉快に人畜が居つく。外では海の潮が荒れ狂っても、此の中は楽園となるのだ。海の波が土地を奪おうとして岸を噛んでも大勢が力をつにして急いでその欠隙(けつげき)をふさぎにゆく。そうだ。私は此の考えに従う。これが叡智の最後の断案だ。凡そ生活でも自由でも日々に之を贏(ら)ち得て始めてこれを享有する権利が出来る。だから此処では、子供も、大人も、年寄りも、そういう危険に取り巻かれながら、健気(けなげ)に命を送るのだ。私はそういう人々を眼の前に見て、自由な民と一緒に自由な土地に住みたい。』彼は心の中でそう思った。荒れすさぶ情感の海と戦いながらも、日々にそれを克服して高い理想を実現しつつゆく。それがファウストの行路であり、また一般人類の行く路である。彼はそうした理想郷を眼前にまざまざと画(えが)き出して、感激の余り思わず叫んだ。

『そうだ。そういう「刹那」に向かって私は呼びかけてもよい。「止まれ、お前は如何にも美しいから」と。ああ、私が此の世に残す跡は幾劫を経ても滅びはしまい。そういう大きな幸福を予想して、私は一番高い刹那を味わうのだ。』と。

此の言葉と共にファウストは斃れた。時計は止まった。そうして真夜中のように沈黙した。針は落ちた。済んだ。過ぎ去った。偉大なファウストの地上の生活は終わったのである。如何なる「刹那」にもせよ、「止まれ、お前は如何にも美しいから」と云うが最後、死ななくてはならない契約をファウストはメフィストフェレスに与えてあったからである。

メフィストは斃れたファウストの側に立ち寄りながら改心の笑いを洩らした。

『此の男は何の楽しみにも飽かず、どの利福にも安んぜずに、変転する姿を追うて歩いて、随分おれに反抗したものだが、とうとう時節到来で、空虚な刹那を止めたいと望んだものだ。へん、斯うなると見ると、あったことも無かったことと何の変わりもない。一体何の為に永遠に物が作られるのだ。そうして「無」の中へ追い込まれるのだ。それに何の意味があるのだ。初めから無かったとおなじではないか。おれは矢張り「永遠の虚無」がよい。』

愚かにもメフィストは賭に勝った積もりで居るのである。彼には霊の世界のことが全く解らないからである。

### 十三 薔薇の雨

さすがに偉大であったファウストの生涯も、遂に時節が来て此の世の終わりに到達した。宏大な宮殿も、美しい庭苑も、死の前には悉く空虚な借り物に過ぎない。貴く大なるものも、卑しく小なるものも、最後にその形骸を横たえる所は、等しく皆、冷たく浅ましい墓穴の中でなくてはならない。ファウストの遺骸はやがて死霊のレムウルによって掘られた墓の中へ埋められた。残るのは霊の問題である。

『身体(からだ)は横たわっている。そして霊は逃げ出そうとしている。私は大急ぎで血書の証書を見せてやるんだ。……』

メフィストフェレスは当初の契約によってファウストの霊は自分の手に入るものだと信じて居るのである。繰り返して云ったように、現実の世界、物質の世界のみを見て、精神の世界のことのわからない彼は、軽率にもファウストの死を自分の勝利だと信じたのである。

『しかし近頃は悪魔の手から霊を掠(かす)め取る沢山の手段が出来て来て、昔の儘の遣り方ではうまく行かないし、新しい方法には此方(こっち)が不馴れと来ている。どうも手伝いを連れて来なくてはなるまい。』

メフィストが斯う考えたのに無理はなかった。昔は最後の息と共に霊が身体を離れたのであるが、仮死と死との区別が六ヶ敷くなってから、元素が分解して居たたまらなくなる迄は、霊も身体の中に止まって居るからである。それ故悪魔も日夜の区別なく、「何時」、「どうして」、「何処から」霊が飛び出すか、怠らずに張り番してはならない。メフィストが手伝いとして呼び出したのは、真っ直ぐな短い角を持った肥大(ふと)鬼と、長い曲がった角のある痩せ鬼とであるが、霊を直接呑み込むことの出来るように、「地獄の脰(あご)」も助けに来たのである。肥大鬼は臍から下を、痩せ鬼は臍から上を分担して番をする。地獄の脰は傍らにひかえている。これは希臘人の考えた地獄や、我々東洋人の思っている地獄とは全く異なって、大きな口を開いている怪物である。真っ赤に燃え爛れている両脰の奥深くには、ダンテの謂うデイスの国、「焰の城」が永久の灼熱に燃えているのが見える。無数の霊が此の中に呑み込まれ、その鋭い歯で噛み砕かれたのである。メフィストはこんな風に周到な用意をして、ファウストの霊が遺骸から飛び出すや否や引き捕らえて自分のものにしようと、非常に緊張した心持ちで、その脱出を待っていた。

その時天の一方から合唱の声がきこえて来た。

従えよ、み使いたち、  
天にゆかりある輩(ともがら)、  
なよやかに翔(か)けながら。  
罪あるものを赦し、  
塵にも盛名を与えんため。

-----

美しい少女の姿をした天使の群れが、静かに舞い翔(かけ)りながら近づいて来たのである。メフィストは不愉快そうに顔を顰(しか)めながら部下の悪魔どもに警告を与えた。

『ああ厭な声が聞こえて来やあがる。我々から幾つかの霊を横取りしたのはあいつ等だ。仮面(めん)を被っているものの、彼奴等も悪魔なんだ。今度負けたら末代までの名折れになる。さあ、墓の側へ立ち寄って、しっかり番をしてくれ。』

眼にはゆき薔薇よ、  
香油を送るものよ、  
ひるがえり漂う薔薇よ、  
ひそやかに生命を与うるものよ、  
翼ある小枝よ、  
ほどかれし荅(あずき)よ、  
疾(と)く花咲け。  
春よ、うちひらけ、  
赤くまた緑に  
天国をもたらせや、  
憩える者へ。

天使等は薔薇の花を撒き散らしながら、こういう歌をうたって、憩える者ファウストに近よって来る。薔薇の花は天使等の指頭を離れると、碧く澄んだ空気の中に暫く翻(ひるがえ)り漂った後、ファウストの墓の上へと落ちて来る。天の愛の火花とも云うべき此の薔薇の花には、物を生かす力が籠もっているのである。それ丈に万物の存在を否定する悪魔たちにとって、これほど都合の悪いものはないのである。肥大鬼と痩せ鬼とは落ちて来る薔薇の花を吹き飛ばそうとするのであるが、吹かれて花は焰(ほのお)となる。そうして悪魔の身の皮を焼き爛(ただ)らすのである。

幸なる花、  
楽しき焰、  
愛をひろげ、  
喜びを作る。

天使の群れは歌いつれ、舞いつれながら、愈々強く薔薇の花を撒き散らす。悪魔たちは長くそれを防いでいることは出来なかった。彼等は身を灼く焰の雨に堪えられないで、翻筋斗(とんぼがえり)をして地獄に墮ちて行った。それを見ていたメフィストは、味方の不甲斐なさを罵り詛いながら、健気(けなげ)にも自分一人踏み留まって防禦につとめた。彼は飛び散る薔薇を右に払い左に避けながら怒鳴っていた。

『ええ、鬼火ども、失せやあがれ。未だそんなに強く光ってるのか。ううむ。松脂(まつやに)か雄黄(ゆうおう)のように首根っこにひつつきやあがる。』

実際薔薇の火の強さは地獄の火に数倍して居るので、さすがのメフィストフェレスも段々後退(あとしがり)をせずにはいられなかった。頭も灼け、心臓も灼け、肝臓も灼けるのである。しかし其の中に滑稽な事が起こって来た。天の愛火に灼かれて、メフィストの心にも妙な変化が始まったのである。彼は美しい少女の姿をした天使たちを、初め

は烈しい憎悪と嫌忌とを以て眺めていたのは勿論であったが、時がたち、戦いが続くに従って、不思議にもその姿が漸く美しく見え始めて来たのである。彼は自分の心の中に起こった変化に驚きながらも、その底強い力にどうしても抵抗することが出来なかった。彼は自分を危うくする敵であることをも忘れて、天使の群れに見惚れ始めた。

『うむ。美しい子供たち。お前達は一体ルチフェルの族(やから)なのか。本当に美しいお。接吻がしてやりたい。お前たちは丁度よい時に来たように思われる。私には心持ちよく、自然に思われる。千度もお前たちを見たことがあるようだ。見れば見る程美しい。もっと近寄って来て、よく眺めさせてくれ。』

天使の群れは地上に近づいた。

『さあ、私達は近よってあげる。それなのに何故そう逃げてゆくのか。居られるなら其処に居るがいい。』

そう云われてもメフィストは止まって居ることは出来なかった。彼は天使の持っている魔力を且つ驚き且つ訝(いぶか)りながら、全身を火のように燃やして、美しい姿に見入った。その優雅な四肢のこなし、厳粛で崇高な顔の表寿も彼の心を牽き付けた。しかし彼は到底悪魔の境を脱し得る者ではなかった。天使の口辺りに媚びを送る微笑のないのが物足りなかった。腰から足を被っている長い襜の衣が無かったらと思った。そうして背後附(うしろつ)きのうまそうなのに涎(よだれ)を流していた。

こうなれば戦いの結果は云わずと知れているのである。メフィストが怪しい欲情に現(うつ)を抜かしている間に、天使の群れはファウストの墓を取り囲んだ。そうして彼の霊を抱きとって高く青空へ舞い上がった。

聖なる焰よ、  
それに囲まるる者は、  
善人と共に、  
生きて幸を感じず。  
総て一つとなりて、  
立ち上がり、ほめたたえよ。  
空気は浄(きよ)まりぬ。  
霊よ息づけ。

やっと我に返ったメフィストフェレスは、今更自分の失敗を顧みて苦笑する外はなかった。身体にはヨブのように火膨れの瘤が一ぱいに出来て居る。我が物にする権利があると思っていた大きな宝は奪われてしまった。長い間の奉仕と勤労は無駄になった。それを誰に訴えようもないのである。

『経験を積んで伶俐な筈の男が、ああした子供らしい馬鹿気たことにかかわってれば、結局馬鹿も大抵じゃあ無いよという訳だ。』

彼は性来(もちまえ)の冷笑を寂しく自分の上に向けずにはいられなかった。

## 十四 昇 天

西班牙のモンセルラアかとも思われる高山の絶頂に近い谷間に三人の隠遁者が住んでいる。それは丁度神へ行く道の象徴でもあるかのように、山の低い処と、中間の所と、一番高く一番淨い石の龕(づし)とに分かれていた。最も下に居るのは「沈思せる師父(パアテル・プロフンドゥス)」、中間にいるのは「天使めく師父(パアテル・セラフィクス)」と呼ばれ、最も高い所に住んでいるのは「マリアを敬う学士(ドクトオル・マリアヌス)」と云われる。山は彬々(ひんぴん)たる森林と巍峨(ぎが)たる巖石とに蔽われて、枝は枝と重なり、幹は幹と接し、岩が木の根を支えれば、根は亦岩を抱いて睦まじく、其処には獅子のような猛獣も小児のように優しくなっている。岩間から転び落ちる水は、谷底を撃って霹靂の響きを発するけれども、やがて流れて行って広い平野を豊饒たらしめる。時あって森に荒(すさ)ぶ嵐も、焰を発する雷火も、大気を浄める役目をする。矛盾撞着

に充ちて居るように見える自然の森羅万象も、達観すれば悉くこれ愛の発現に外ならない。最も低い所に居る沈思せる師父はそう考える。そうして紛糾して冷たく鈍い官能の制約の中に苦しんで居る自分の精神を、その愛の焰に燃え上がらせ、種々の雑念を消して、心の奥を神の光で照らしたいと願っている。

とこしえの歡(よろこび)の火、  
燃ゆる愛のきづな、  
煮えたぎる胸の痛み、  
泡立つ神の歡喜。  
征矢(そや)よ、我を貫け。  
槍よ、我を征服せよ。  
笞よ、我を砕け。  
雷火よ、我をうて。  
徒らなるものを、  
総て散ぜしめ、  
永久なる愛の核心なる、  
永久なる星を輝かせ。

虚空を上下に飛翔しながら、こう歌っているのは「感奮せる師父(パアテル・エクスタチクス)」である。この師父の心も、蓋し沈思せる師父と同じ願いに充ちているのであろう。暫くして、髪のように乱れ合っている樅(もみ)の木の葉陰を透いて、朝雲の一団のように漂って来るのは、夜半に産まれて直ぐ死んだ、此の世の塵に汚れない子供等の一群である。これは両親の手からは直ぐ失われたものであるが、天使たちから見れば純な獲得とも云うべき童子たちである。これが天使たちの中で一番下級なものである。此の神々しい童子たちは、未だ地上のことについては何一つ知るところが無いので、感奮せる師父は、彼等を自分の眼の中へ降りて来させて、遠い人間界の有様を眺めさせる。ただ純潔で汚濁を知らないという丈では未だ天使として十分ではないからである。眼の中に入って暫く暗黒な地上を、身を顛(ふる)わせながら観察していた童子たちは、やがて其処を出て一層高い瀨気(こうき)の中へ昇ってゆく。

いざ手つなぎで、  
楽しく輪をつくれ。

こう歌いながら、花環のように円を画いて、山嶺を繞(めぐ)って舞いつれてゆくと、その後を逐うように、ファウストの霊を担った天使たちが現われて来た。

霊の世の貴きもの  
悪より救われたり。  
「常に努めて止まぬ者を  
我等は救うことを得。」  
そして上よりの愛も  
此の人には加われり。  
聖なる群れよ、いざ、  
心より歡び迎えよ。

しかしファウストには未だ下界の屑が石綿のように附着(ひつつ)いている。そうして強い精神の力で掻き集められた要素の中から、その汚穢だけを区分するというような働きは、天使にも付与されてはいない。それが出来るのは独り永久の愛のみである。それ故蛹(さなぎ)のようになったファウストの霊は漸く神々しい童子等の群れに預けられる。童子等は喜んでファウストを受け取った。云わば神から与えられた抵当(ひきあて)を貰ったようなものだからである。

四方の見晴らしのきく山嶺の石龕(せきがん)にいる学士の瞳には、以上のものの外に、

輝く天母の姿が映じて来た。其の周囲を繞(めぐ)って漂いなびいているのは贖罪の女たちであろう。学士は感激に充ちて云った。

世界の最高なる支配者よ。  
碧く張られたる  
大空の幕のうちに、  
君が秘密を見せしめ給え。  
男子の胸を、厳かに  
聖なる愛の心をもて  
君に捧ぐるものを、宣(う)べない給え。  
君が尊く命令し給えば、  
我等の勇氣は抑え難く、  
君が我等を慰撫し給えば、  
我等が灼熱は直ちに静まりゆく。  
最も美しき意味にて浄き処女、  
貴ぶにたえたる母、  
神々と同じ産まれなる、  
我等に選ばれたる女王よ。

樂士の声の終わらない中に天母の尊い姿が現われて来た。赫奕(かくやく)とした光を四方に発しながら、厳かでありながら尚優しさに溢れている慈容慈顔の美しさは、全く天の愛の権化と云っても恥ずかしくはない。さればこそ其の足元には贖罪の女たちが、仰ぎつつ、祈りつつ、母のように慕いまつわっているのである。見よ、その贖罪の女たちを。欲望の鎖は自分の力では断ち難く、過誤への道は滑らかな坂のように滑り易いのが常であるにしても、彼女等が人界で犯した罪は決して軽いものではない。その一人はルカス伝第七章三十六節にある大なる女罪人(マグナ・ペッカトリックス)である。基督がパリサイの一人シモンの家客になっていた時、飛び込んで来て、涙で基督の足をぬらし髪の毛でそれを拭いたと云われる女である。他の一人はヨハネス伝第六章にあるサマリアの女である。ヤコブの泉の側で基督に水を汲み与えた人である。第三はエジプトのマリアと云われる者で、乱行十七年の後、不図エルサレムの寺院で、眼に見えぬ神の力に触れて、それから四十八年の間砂漠の中で悔悟の生涯を送ったと云い伝えられている。こうした女たちでさえも、一度悔い改めさえすれば、慈悲深い天母の側に近づくことが出来るのである。天母の愛はそれ程まで廣大無辺である。彼女等がうち連れて天母の裳裾(もすそ)に寄り添いながら、天母に願った。

大なる罪人の女等にも  
近づくを許し給い、  
贖罪の獲得(えもの)をば  
永遠へ高め給う君なれば、  
一度あやまてるのみにて、  
自ら過てりとも知らざりし  
この善き魂にも  
み赦しを与え給え。

その善き魂と云われたのは、嘗て人界でグレチヘンと呼ばれた女の魂である。一旦の過ちの為に母と兄を死に到らせ、我が兄を水に投じた彼女も、こうして限り無き愛の光を浴びて、天上の群れに交じって居るのである。

見そなわせ、見そなわせ、  
比類(たぐい)なき、  
光あふれたる女神よ。  
我が幸を慈悲深く見そなわせ。  
昔我が愛せし者、

今は独り無きものとなりて  
帰り来たりぬ。

グレチヘンの霊はファウストを天上に再び見ることの出来る喜びを、こうして神母に分かとうとするのである。神々しい童子等に預けられたファウストの霊は、多く学んだ効果が現われて、暫くの間に非常の発達を遂げたので、今はもう神々しい童子等よりは遙かに大きくなったのである。彼はもう全く地上の絆(きずな)を断ち、人間の汚穢から浄められて、新鮮な青春の力に充ちているが、新しい天上の生涯に未だ馴れない為に、眩しように四辺を見て、何うするののかも解らないのである。

『どうか彼の人に教えてやることをお許し下さいませ。』

グレチヘンの霊はこう云って天母に願った。天母は愛に充ちた声で答えた。

『おいで、もう一層高い瀬気(こうき)の中へお昇り。そうすればあのひとも従(つ)いて来る。』

こうしてファウストの霊はグレチヘンの霊に導かれて、いよいよ高い空へ昇ってゆくのである。欠陥の多い此の世の中に完全を求めることは出来ない。しかし努めて已むことのない人間の生活は、畢竟万物の中心を成している天の愛に吸われて、神と合致せずには居ない。神秘的な合唱がその心を歌って、虚空に響いた。

総ての無常なるものは、  
ただ比喩(たとえ)のみ。  
及ばざるもの、  
此処に遂げらる。  
名状し難きもの、  
此処に行われたり。  
永遠に女性なるもの、  
我等を引きゆく。

--- 終 ---